

杉の谷古墳群・カケ塚古墳 埋蔵文化財調査報告書

筑紫野市文化財調査報告書

第2・3集

1979

筑紫野市教育委員会

序

筑紫野市は昭和47年市制施行以来、緑と太陽の町づくりをスローガンに、福岡都市圏のベッドタウンとして都市化が著しく、人口も今日では5万5千人を越えています。その裏には、地中に埋もれている貴重な文化財が破壊されていることを忘れてはなりません。いいかえれば、今日の発展は、数多くの文化財の犠牲の上に成り立っているといっても過言ではないと思います。

今回のこの報告書は昭和47年に行なった、林道工事に伴う杉の谷古墳群の調査と、昭和54年に行なった宅地造成に伴うカケ塚古墳の発掘調査の記録であり、前者については、当時本市在住であった、別府大学文学部助教授小田富士雄先生（現在北九州市歴史博物館主幹）をはじめ同大学研究室の皆様のご協力で調査したものであり、また後者は、北九州市高田屋㈱及び三井建設㈱のご協力を受けたものです。それに発掘調査、遺物整理に参加された、地元の人々のあたたかいご協力に対し心より感謝の意を表したいと存じます。

最後にこの報告書第2・3集が、筑紫野市の文化や歴史に対する理解の一助として、多くの方々に学習や研究の参考に利用して載くことを願いたします。

昭和54年12月25日

筑紫野市教育委員会

教育長 萩尾 利弘

杉の谷古墳群

筑紫野市大字阿志岐杉の谷所在古墳の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 2 集

1979

筑 紫 野 市 教 育 委 員 会

例 言

1. この報告書は、筑紫野市大字阿志岐杉の谷に所在する杉の谷古墳群（第1～3号墳）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、別府大学考古学研究室の協力を得て、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 遺物の整理・報告は筑紫野市教育委員会が行なった。
4. 本書の執筆は、Iを山野洋一が、II～IVを奥村俊久が担当した。
5. 本書の編集は山野洋一が担当し、奥村俊久が協力した。

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
3 調査経過	2
II 位置と環境	5
III 調査の内容	7
1 杉の谷第1号墳	7
2 杉の谷第2号墳	13
3 杉の谷第3号墳	26
IV まとめ	30

図版目次

	本文対照頁
PL. 1-1 杉の谷古墳群遺跡遠景写真（北西より）	5
2 杉の谷第1号墳石室全景	7
PL. 2-1 杉の谷第1号墳前室遺物出土状況	8
2 杉の谷第1号墳鉄鏝	8
PL. 3-1 杉の谷第1号墳馬具・金環・石鏝	8
2 杉の谷第1号墳須恵器	11
PL. 4 杉の谷第1号墳須恵器・土師器	9
PL. 5-1 杉の谷第2号墳近景	13
2 杉の谷第2号墳閉塞状況・前庭部遺物出土状況	13
PL. 6-1 杉の谷第2号墳石室（羨道部）	13
2 杉の谷第2号墳玄室（左側壁）	13
PL. 7-1 杉の谷第2号墳玄室（奥壁）	13
2 杉の谷第2号墳鉄鏝	16

PL. 8-1	杉の谷第2号墳鉄器(馬具・工具)・丸玉・石器	16
2	杉の谷第2号墳須恵器	19
PL. 9	杉の谷第2号墳須恵器	19
PL. 10	杉の谷第2号墳須恵器・土師器	23
PL. 11-1	杉の谷第3号墳近景	26
2	杉の谷第3号墳玄室(奥壁)	26
PL. 12-1	杉の谷第3号墳鉄鎌	28
2	杉の谷第3号墳馬具・工具	28
3	杉の谷第3号墳直刀	28

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1	杉の谷古墳群周辺遺跡地図
Fig. 2	杉の谷第1号墳石室実測図
Fig. 3	杉の谷第1号墳出土金環
Fig. 4	杉の谷第1号墳出土鉄器実測図
Fig. 5	杉の谷第1号墳出土須恵器実測図
Fig. 6	杉の谷第1号墳出土須恵器土師器実測図
Fig. 7	杉の谷第1号墳出土石鎌
Fig. 8	杉の谷第2・3号墳地形図
Fig. 9	杉の谷第2号墳墳丘土層断面図
Fig. 10	杉の谷第2号墳石室実測図
Fig. 11	杉の谷第2号墳閉塞状況
Fig. 12	杉の谷第2号墳出土丸玉
Fig. 13	杉の谷第2号墳出土鉄器実測図
Fig. 14	杉の谷第2号墳出土鉄器実測図
Fig. 15	杉の谷第2号墳出土鉄器実測図
Fig. 16	杉の谷第2号墳出土須恵器実測図
Fig. 17	杉の谷第2号墳出土須恵器実測図
Fig. 18	杉の谷第2号墳出土須恵器実測図

Fig. 19	杉の谷第2号墳出土須恵器・土師器実測図	25
Fig. 20	杉の谷第2号墳出土石器実測図	25
Fig. 21	杉の谷第3号墳石室実測図	折りこみ
Fig. 22	杉の谷第3号墳出土鉄器実測図	27
Fig. 23	杉の谷第3号墳出土鉄器実測図	28
Fig. 24	杉の谷第3号墳出土須恵器実測図	29
Fig. 25	杉の谷古墳出土須恵器ヘラ記号	32

I 調査の経過

1 調査にいたる経過

筑紫野市大字阿志岐字杉の谷に所在する杉の谷古墳群の発掘調査は筑紫野市森林組合による里山開発計画による林道工事に起因するものである。

1972年4月、工事計画地域内に古墳の存在を感知した本市森林組合より市教育委員会にその所在の現地確認要請があり、ただちに現地におもむき調査した結果、すでに盗石、盗掘を受けた古墳を3基確認した。

古墳の現地保存を第一と考えた市教育委員会は森林組合へ林道路線の変更を強く要請した。しかしながら古墳が全て山地の尾根線の上に構築され、路線を急勾配の斜面に変更できず2基は破壊を避けられなかったが、1基のみセットバックし盛土することによって現地保存することで協議をおえた。またこの工事を梅雨明け後ただちに実施するとのことで、調査体制の不十分な市教育委員会として調査者さがしに苦慮した。ちょうどその頃（同年5月）本市武蔵に在住されていた別府大学文学部助教授小田富士雄氏に協力要請したところ同大学のころよい配慮により市教育委員会が調査主体者となり、別府大学考古学研究室が調査を補助するというかたちで予算的・期間的に制約された調査をせざるをえなかった。3基の古墳は前述したごとく全て盗石・盗掘を受けており江戸時代及び昭和初期の二度にわたり宝満川の堰築造等の際に古墳の天井部の石材を抜き取られているところから石室内部構造の確認に主体をおいた調査を実施した。

2 調査の組織

杉の谷古墳群の発掘調査は1972年5月15日から同月29日までの15日間にわたって、別府大学文学部考古学研究室と筑紫野市教育委員会との協力のもとに実施した。調査関係者は次のとおりである。

別府大学考古学研究室

教授 賀川光夫 助教授 小田富士雄 講師 橘昌信

学生 網田克美、倉原謙治、森永弘太、和田利徳、平之内幸治、鹿児島愛里

筑紫野市教育委員会

教育長 山崎茂太 社会教育課長 武藤久雄 社会教育係長 笠武人

社会教育係主事 山野洋一 中央公民館係長 竹田征治

調査協力者

二宮忠司, 横山邦継, 藤田等 (以上, 福岡市教育委員会文化課), 上村佳典 (別府大学OB)

坂田邦洋 (長崎大学医学部解剖学教室), 地元上阿志岐東地区住民の方々。

3 調査経過

5月15日(月) 晴れ

午前中調査関係者, 市教育委員会に集合して調査に対する打合せを行う。午後より現地におもむき地元作業員, 市森林組合とで各古墳の墳丘及び周囲を伐採し, 作業終了後慰霊祭を行う。

1号墳は盗石・盗掘が顕しく, 墳丘の保存状態もわるい。2号墳も盗掘を受け天井部の石が落ち込んでいるが, 羨道部付近については保存状態は良好と思われる。3号墳はすでに開いており, 複室横穴式古墳であることが判明すると同時に後室天井石のすぐ下の石が抜かれていて, 昔の盗掘口と考えられ古墳群の中では最も石室がよく残っているものである。また, 本日の伐採中, 古墳か自然石の露頭と考えられるものが1号墳から北へ5m程の所より発見され明日より確認を行う予定。

5月16日(火) 雨のち晴れ

1号墳と新たに古墳と考えられるものについて, トレンチを設定して確認する。1号墳はすでに露頭していた石の袖石であり, 羨道部が顕しく盗石され石室の天井石が落ちこんでおりチェーンブロック等を使用して床面検出にかかる。その間遺物として須恵器等の破片が出土する。また新たに発見された古墳の確認は1×4mのトレンチを設定し発掘を行ったが, 自然石の集積らしく何ら遺構・遺物も検出されず本日をもって調査対象よりはらず。

5月17日(水) 晴れ

1号墳及び新たに2号墳に作業を集中する。石室の床面を出しはじめるが敷石の状態は不明瞭で前室と後室の間より鉄器・馬具等を検出し, 午後床面検出に全力を注ぐ。その結果, 鉄器・馬具と対象的な位置よりまとまった須恵器が出土した。2号墳天井部は盗石を受けチェーンブロック等を用いて落石を排除すると同時に羨道付近の発掘を行い午前中に須恵器等を検出する。また午後より作業は進み閉塞部, 羨道部が明瞭になるが, 後室の方はほとんどの積石が落ちかかっていて腰石においてしか復元されない状態であった。

5月18日（木） 晴れ

1号墳は昨日に引きつづき床面検出に終止し、その結果鉄器・馬具・須恵器・金環等の出土面が床面らしく石室内の清掃を行う。2号墳の作業としては昨日と同様であったが、羨道部の清掃は終り、後室についても午後より大体床面が判明しはじめた。

5月19日（金） 雨

早朝より雨のため現場における作業は中止し、宿舎においてミーティングを行う。

5月20日（土） 晴れ

1号墳は前日の雨のため石室・遺物の清掃を行い、午後よりまとまった敷石が検出される。

2号墳は羨道部の清掃をし、前庭部より遺物の集中が考えられるので、新たに拡張し作業を行いきりの須恵器が出土する。また、墳丘の確認を行うために東側（側壁部）と北側（奥壁部）の2ヶ所にトレンチを設定し作業を行う。石室内清掃中、中央部より高坏を発見する。

5月21日（日） 晴れ

1号墳は午前中前室、羨道部及び遺物、石室全体の写真撮影を終了する。午後より石室に割り付けを行ない実測にかかる。2号墳は午前中までに昨日拡張した前庭部の遺物写真撮影を行うと同時に石室内清掃中、玉類が4個出土する。午後より前日からの墳丘の立て割り作業もほぼ終了し土層の検討を加える。3号墳は、本日より作業に入り羨道部・前庭部の発掘に入り石室内部の清掃も平行して行う。

5月22日（月） 晴れ

1号墳は昨日と同様実測を行い、平面図のみ終了する。2号墳は後室の床面出しに集中しほぼ終了したので割り付けに入るが、後室内に鉄片が散乱していて盗掘の際のものと考えられる。また平行して作業を進めていた墳丘の断面図作製を完了する。3号墳は石室の床面がはっきりしないが、前室部が高かったために掘り進む、それにより仕切石、敷石が検出され、直刀、馬具、鉄鏃等の鉄器がまとまって発見された。

5月23日（火） 晴れ

1号墳は平面、横断面、縦断面図全ての図面を終了する。2号墳は石室内割り付けを終了し羨道部の遺物集中部分の平面実測を終了する。3号墳は本日作業を行わなかった。

5月24日（水） 晴れ

2号墳は平面図及び後室横断面図をほぼ終了し羨道部の遺物とり上げを行う。3号墳は午前中遺物を清掃し写真撮影を行い、午後より石室に割り付けを行い平面図作製作業に入り50%程終了する。また、本日午後1時より新聞記者（報道関係者）と現地にて会見を行う。

5月25日（木） 曇り

2号墳は閉塞部がよく残っているために、縦断面図作製に時間をついやす。3号墳は平面図を完成し縦断面図に入る。1号、3号墳の鉄器、馬具等の取り上げを行う。また午後より各古

墳の標高を出す作業を行い、1号墳は93m 31cm 5mm、2号墳は106m 38cm 5mm、3号墳は103m 58cm 5mmとなる。

5月26日（金） 雨

早朝より雨のため現地での作業を中止して、市中央公民館にて、先日取り上げた遺物（鉄器・馬具・須恵器等）の整理を行う。

5月27日（土） 曇りのち雨

本日は天候が不順であったが、作業の進行が停滞ぎみであるので現場作業を行う。2号墳は閉塞部の石をはずしながら縦断面図を作製する。3号墳は縦断面図を終了する。午後より福岡市文化課二宮、藤田両氏の協力を得て、2号・3号墳付近の地形測量を行う。

5月28日（日） 曇りのち晴れ

2号墳は前日と同様に作業を進め、閉塞部付近より遺物が集中し、馬具・鉄鍬・練玉・土師器・須恵器等が出土する。3号墳は午前中に全ての図面を終了し、午後より石室内を清掃して写真撮影を行い作業を終了する。

5月29日（月） 晴れ

2号墳のみ作業が残り午前中に遺物の取り上げを行い残りの図面等を終了し、午後より現地での機材、用具、遺物等を市中央公民館の方へ運搬し現場での全ての調査を終了する。

II 位置と環境

筑紫野市の西には背振山塊、北東には三郡山塊が迫り、その間に狭長な筑紫野の平野がある。筑紫野平野は北西に福岡平野を、南に筑後平野を望み、古代から交通の要所となっている。筑紫野市内の北西には鷺田川があり、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。東には筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川は三郡山を源に、その東麓を回り込むように流れた後、吉木・阿志岐の平野を潤し、永岡付近で九千部山に源を発する山口川と合流する。吉木・阿志岐の東には宮地岳(標高339m)があり、その山麓には推定数百基におよぶ古墳があるといわれている。古墳のほとんどは群集し、古墳群を形成している。(註1)

杉の谷古墳群は筑紫野市大字阿志岐字杉の谷に所在し、宮地岳西麓中央より西へ延びる尾根上にある。1号墳が最も先端にあり、尾根の南側斜面(標高93m)に構築されている。2号墳は尾根頂部(標高106m) 3号墳は尾根頂上部南側(標高103m)に構築されている。4号墳はさらに山頂よりの尾根頂部に構築され、いずれも南側谷部へ向い開口する。

本古墳群の南には阿志岐古墳群(註1)(43基)、天山古墳群(註1)(7基)が、また宝満川を挟み対岸丘陵部には塚口古墳群(註2)(16基)を始め多くの古墳が分布する。また歴史時代では蘆城の駅家と思われる遺跡(註3)を視下に望み、大宰府より米ノ山峠を越えて飯塚へぬける古道があった。

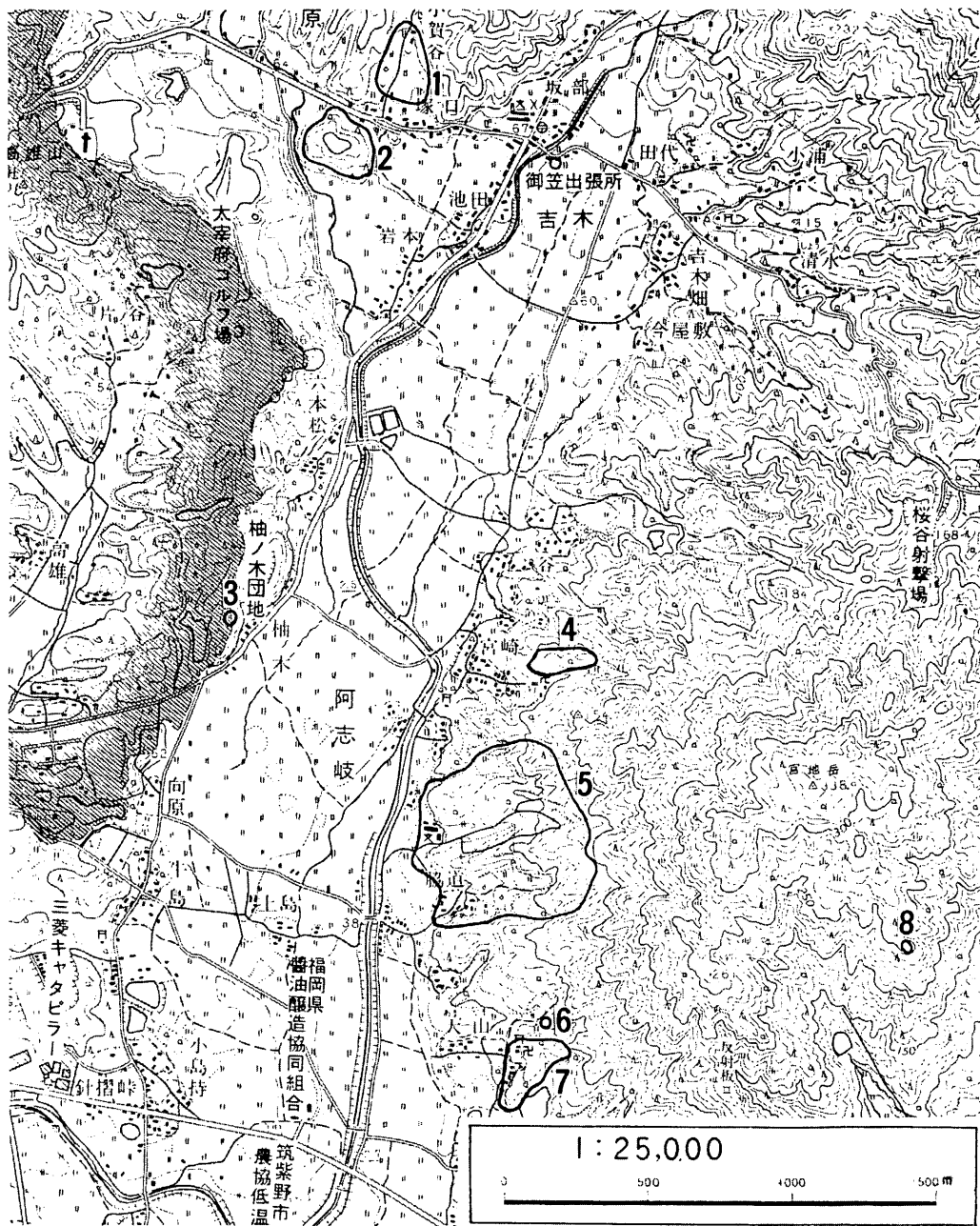
宮地岳西麓には現在、福岡県立農業試験場が建設中であるが、本山麓には前述のとおり相当数の古墳が密集しており、さらに阿志岐シメノグチ遺跡(註4)には縄文時代晩期の住居跡や、弥生時代の祭祀跡があり、周囲には甕棺墓のあることも確認されている。また南麓には押型文土器を出土する峰古野遺跡がある。開発の波は福岡市から大野城市をこえ筑紫野市へ延びつつある。無秩序な開発を防ぐためにも宮地岳山麓の遺跡群の状況把握は必要欠くべからざるものであり、杉の谷古墳群調査の意義は高い。

註1 筑紫野市教育委員会編 遺跡分布調査

2 日本窯業史研究所 「昭和48年塚口古墳発掘調査略報告」

3 浜田信也 「蘆城の駅家跡を発見」 考古学ジャーナル No.160 1979

4 筑紫野市教育委員会編 「阿志岐シメノグチ遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972



- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| 1. 小賀谷遺跡 | 4. 杉の谷古墳群 | 7. 天山古墳群 |
| 2. 塚口古墳群 | 5. 阿志岐古墳群 | 8. 殿様塚古墳 |
| 3. 柚ノ木一号墳 | 6. 峰古野遺跡 | |

Fig.1 杉の谷古墳群周辺遺跡地図

III 調査の内容

1 杉の谷第1号墳

墳丘

墳丘は、盗掘や以前隣接してあった炭焼小屋などによる地形変更でほとんど取り払われており、南側は林道によって破壊され、袖石の上部が露出する状況であった。

石室 (Fig. 2, PL. 1-2)

内部主体は主軸をN-18°-Eにとり南に開口する。石室はすでに多くの石材がぬかれ、開口部付近が林道によって切られているため詳細は不明瞭である。

玄室は長さ2m、幅1.9~2.4mを測るやや胴の張る略正方形プランを呈す。奥壁は床面より高さ1.2m、幅1.9mの三角形の大石を一枚立てて腰石とし、両辺に一辺40~50cm大の石を小口積する。両側壁は各々2個の石材を腰石としており、左奥壁側の腰石上部にのみ横積みされた2段の石材が残る。床面は壁際に敷石がみられるが、本来は全面に敷かれていたものと思われる。玄門部右袖は床面より高さ0.5m、左袖は1mの方柱状の石材を用い、玄門部の幅は梱石上で1.1mを計る。玄門部梱石は2個で長さは85cmと40cm、最大幅は共に19.3cmで床面下に深く埋められている。玄門部より羨道にかけて、壁材の大部分がすでにぬかれているが敷石の広がり、さらに前方に裾えられている梱石により前室のあったことが推測される。

敷石は梱石間1.5m、幅1.5mにまとまって残っており、ほぼ前室の広さを示すものと考えられる。前門部梱石は一個で長さ62cm、幅18cmである。羨道部は左壁体に腰石一個が残っているにとどまる。前門部梱石の前には長さ63cm、幅67cmの扁平な石材をはじめ比較的大ぶりの石材が散乱しており、前門部梱石上に積まれてあった閉塞石と考えられる。

以上の点から石室は複室・両袖型横穴式石室と考えられ、石室全長は現存の5mをやや上回る程度のものであろう。

遺物 (Fig. 3~7, PL. 2~4)

出土状況

すでに盗掘をうけており、玄室内からは遺物を検出することはできなかったが、前室部床面は比較的良好な残りをみせ、ほとんどの遺物はこの部分より検出された。

玄門部近くから金環が出土し、右袖石の手前からは馬具、さらにその手前から鉄鏝が出土した。土器は敷石の左奥角から右前角にかけて散乱し、左端からは高坏が出土した。

以上の前室部のほかに石室前部からも須恵器と石鏃が出土したが、この須恵器は前室部のものより古い様相を示している。

出土遺物

- | | | |
|---------|--------|--------|
| (1) 装身具 | 金環 | 1 個 |
| (2) 武器 | 鉄鏃 | 4 本以上 |
| (3) 馬具 | 轡 | 一式 |
| (4) 土器 | 須恵器 | 13個体以上 |
| | 坏(蓋・身) | 9 個体 |
| | 高坏 | 1 個体 |
| | 平瓶 | 2 個体 |
| | 甕 | 1 個体以上 |
| | 土師器 | 3 個体 |
| | 椀 | 3 個体 |
| (5) その他 | 石鏃 | 1 本 |

金環 (Fig. 3, PL. 3-1) 断面径は $6.2 \times 5.2\text{mm}$ の中空の銅胎に金箔をおいたものであるが、金箔の残りはよくない。環の $\frac{1}{8}$ は欠失するが、外径は 2.2cm 程度と推測される。

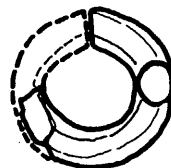


Fig. 3 杉の谷第1号墳
出土金環(実大)

鉄鏃 (Fig. 4-1~5, PL. 2-2) 1は圭頭広根斧箭式に属するもので、刃部長 4cm 、鋒部長 9cm を計る。茎部には樹皮がまかれている。2・3は円頭広根斧箭式に属するもので刃部長 $2.1 \sim 2.4\text{cm}$ 、鋒部長 $7.1 \sim 7.5\text{cm}$ を計る。4は方頭広根斧箭式に属するものである。

馬具 (Fig. 4-6~9, PL. 3-1) いずれも鍔が甚しい。6は素環の鏡板で、外径 $6.1 \times 7\text{cm}$ を計る楕円形を呈す。7・8は引手金具で、端部を一方に丸く曲げている。長さは7が 14.2cm 、8が 15.1cm を計る。

須恵器 (Fig. 5, PL. 3-2・4)

坏蓋 (Fig. 5-1~5, PL. 4)

各古墳出土の蓋をI~IV類に区分した。

I類 口径 $12.4 \sim 13.2\text{cm}$ 、器高 $3.5 \sim 3.7\text{cm}$ 、身受けのかえりなし。

II類 口径 $11.6 \sim 13.4\text{cm}$ 、器高 $3.6 \sim 4\text{cm}$ 、身受けのかえりなし。

III類 口径 $10.4 \sim 10.8\text{cm}$ 、器高 $3.5 \sim 3.6\text{cm}$ 、身受けのかえりなし。

IV類 口径 $13.3 \sim 13.6\text{cm}$ (口端部径 $15.8 \sim 16.2\text{cm}$)、器高 $2.9 \sim 3.9\text{cm}$ 、身受けのかえりを有す。

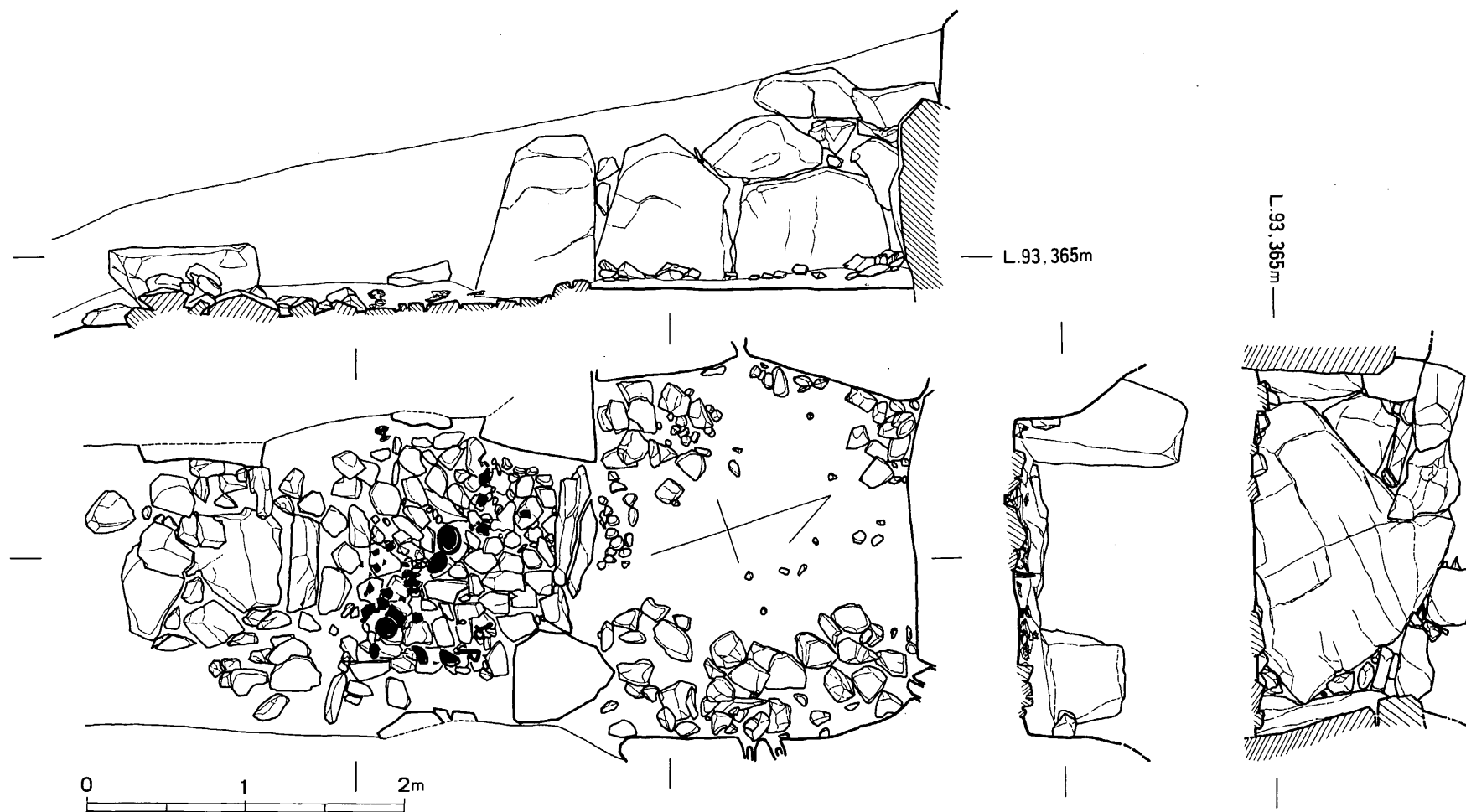


Fig.2 杉の谷第1号墳石室実測図(縮尺1/40)

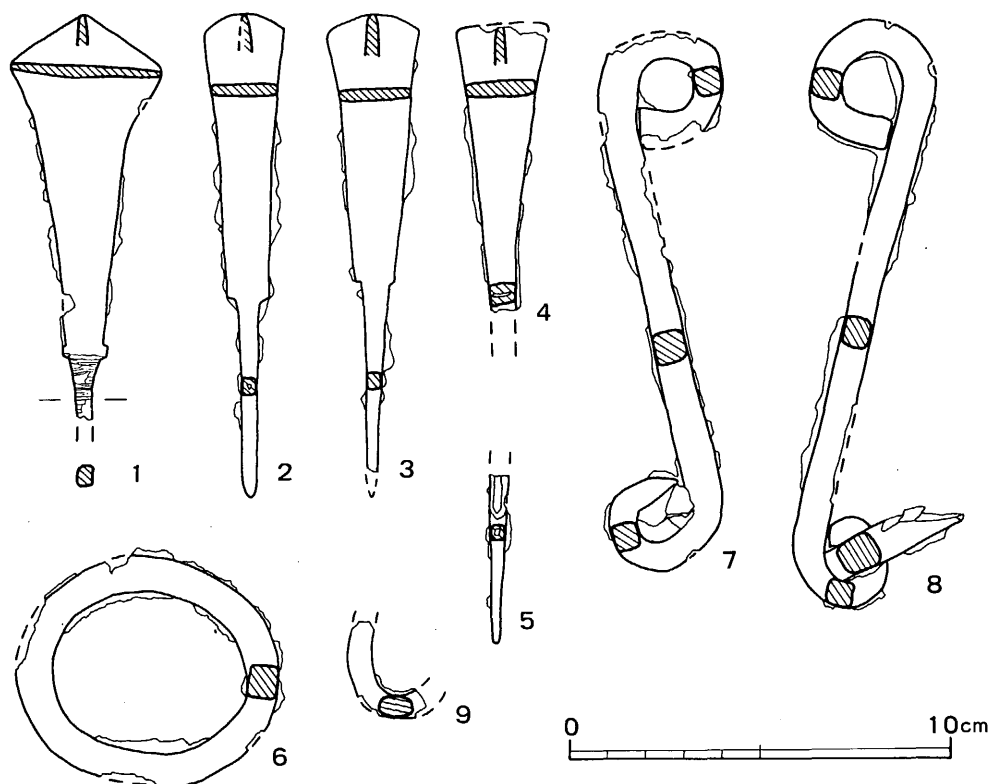


Fig.4 杉の谷第1号墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)

第1号墳出土のものはⅢ・Ⅳ類である。

Ⅲ類 (Fig.5-1・2) 1は口径10.8cm, 器高3.6cmを計る。天井部から丸みをもって内湾気味の口縁に移行し、端部は丸くおさまる。天井部には器面の $\frac{1}{2}$ 程度に手持ちによるへら削りが施されている。色調は明灰色、胎土は砂粒を含み、焼成はあまい。2は口径10.6cm器高3.6cmと推定されるもので、天井部と体部の境に2本の沈線がめぐり、天井部全面に回転へら削りが施される。色調は青灰色、胎土はやや砂粒が多く、焼成は良好である。

Ⅳ類 (Fig.5-3~5) 擬宝珠形の撮のある平坦な天井部から丸みをもって、外反気味の口縁部に至り、内面のかえりは口端部より上方にある。天井部は右回転のへら削りの後、カキ目調整が行われている。色調はいずれも淡青灰色を呈し、胎土はやや砂粒を含む。焼成はあまい。

杯身 (Fig.5-6~9, PL.4)

各古墳出土の身をⅠ~Ⅳ類に区分した。

Ⅰ類 口径10.2~11cm, 器高4.1cm, 立ち上り高1.4cm。

Ⅱ類 口径11.2~11.4cm, 立ち上り高0.5~1cm。

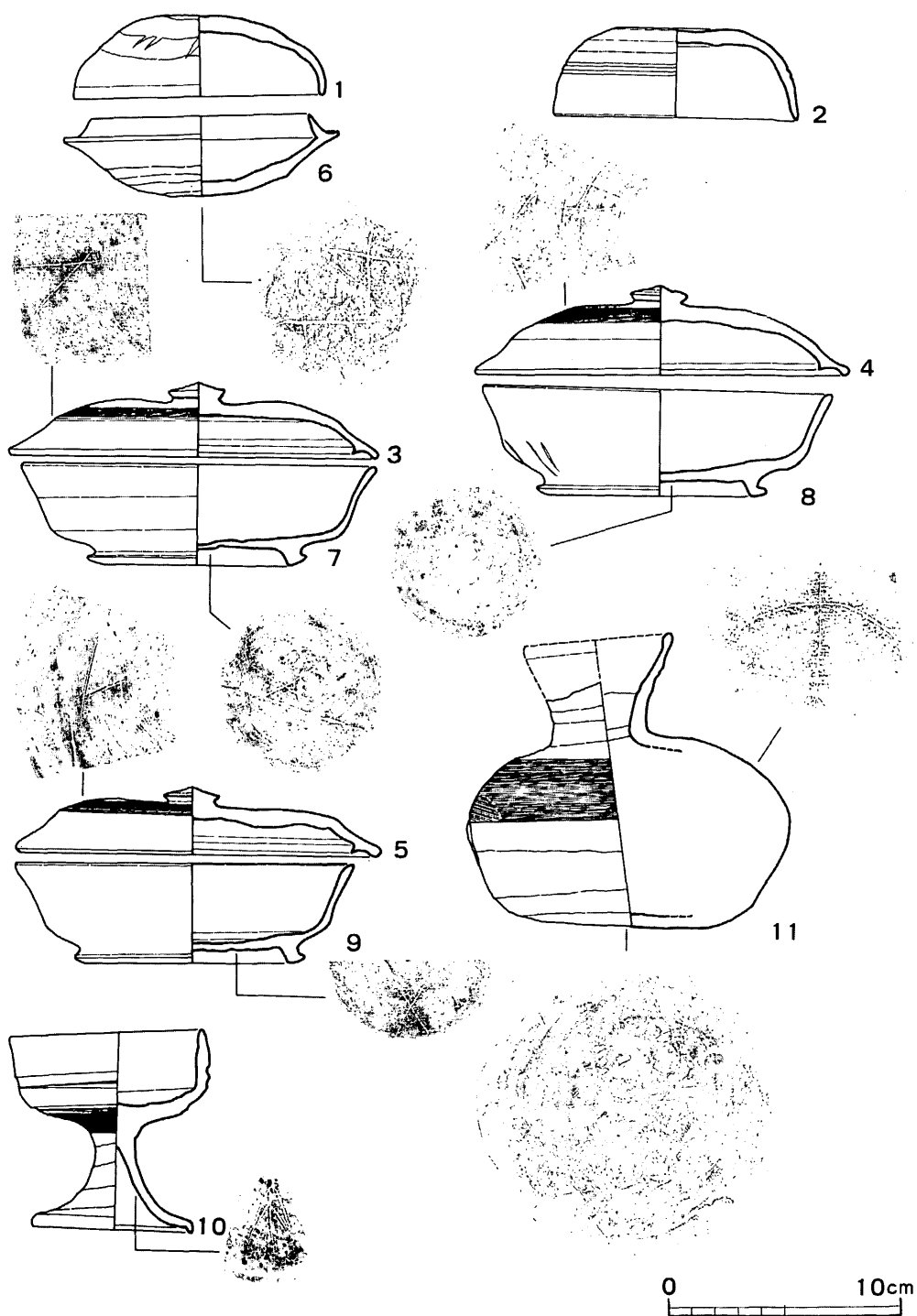


Fig.5 杉の谷第1号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

Ⅲ類 口径9.4~10.9cm, 器高3.2~4.2cm, 立ち上り高0.5~0.9cm。

Ⅳ類 口径14.7~15.5cm, 器高4.3~4.6cm, 立ち上りなし。

第1号墳出土のものはⅢ・Ⅳ類である。

Ⅲ類 (Fig. 5-6) 口径9.4cm, 器高3.5cm, 立ち上り高0.8cmである。立ち上りは外反気味に内傾し, 受部は水平またはやや上方に引き出される。受部と体部との境は不明瞭で, 底部まで丸味を帯びて移行する。底部には器面の $\frac{1}{2}$ 程度に手持ちによるへう削りがなされている。色調は青灰色, 胎土はやや砂粒を含み, 焼成はあまい。

Ⅳ類 (Fig. 5-7~9) 口径14.7~15.5cm, 器高4.3~4.6cmを計る。底部と体部の境はあまく屈曲し, 体部は外傾して立つ。口縁部はやや外反し, 端部は丸く収まる。高台は高くなく, 外傾し, 脚端部は外側にはね上る。色調は淡青灰色, 胎土はやや砂粒を含み, 焼成は全体によくなく, 7・9が特に不良である。

坏は1と6, 3と7, 4と8, 5と9がセットをなし, 1・2を除くすべての杯にへう記号が認められ, Ⅳ類の蓋・身にはいずれも同種のへう記号を残す。

高坏 (Fig. 5-10, PL. 3-2) 1個体の出土がある。口径8.6cm, 器高8.7cm, 脚端径7cmである。杯部は底部と体部の境に沈線が1周半する。体部は直行またはやや外傾し, 口縁端部は丸くおさまる。底部はへう削りのあとカキ目調整が施されている。脚部はゆるやかなカーブをもって外開し, 脚裾端部は下方にひねり出されている。色調は暗青灰色, 胎土, 焼成は良好である。

平瓶 (Fig. 5-11, Fig. 6-12, PL. 3-2) 12は口縁部および胴部の $\frac{1}{2}$ を欠失するが, 頸基部は太くないようである。肩部にカキ目調整が施され, 体部は中央が膨り, 体上部に2本の沈線がある。体下部から底部にかけてはへう削り調整され, 底部にはへう記号を有す。色調は青灰色, 焼成は良好である。11は口径6.4cm, 器高12.8cmを計る。口頸部は体部の中心をやや外れて接合されている。体部はゆるやかに湾曲し底部に至る。体部上半にはカキ目調整, 体部下半から底部にかけてはへう削りが行なわれている。また, 体部上部と底部にへう記号が認められる。色調は黒灰色, 胎土はやや砂粒が多く, 焼成は良好である。

土師器 (Fig. 6, PL. 4)

椀 (Fig. 6-13~15, PL. 4) 3個体が出土している。13はほぼ完形であるが, 14は $\frac{1}{2}$, 15は $\frac{3}{4}$ ほどが欠失している。13は口径11.6cm, 器高4.5cmで, 手持ちのへう削りによって整形された底部から体部にかけて内湾し, 開き気味に直立する口縁部に至る。14は口径10.3cm, 器高は4.3cmある。底部から丸みをおびて, 内湾ぎみの口縁部に至る。15は口径10.8cm, 器高3.9cmと推定される。底部は手持ちのへう削りによって整形され, 内湾しながら口縁に至る。口縁端部はやや尖り気味で収まる。椀の色調はいずれも明褐色を示し, 胎土は良好であるが, 焼成はあまい。

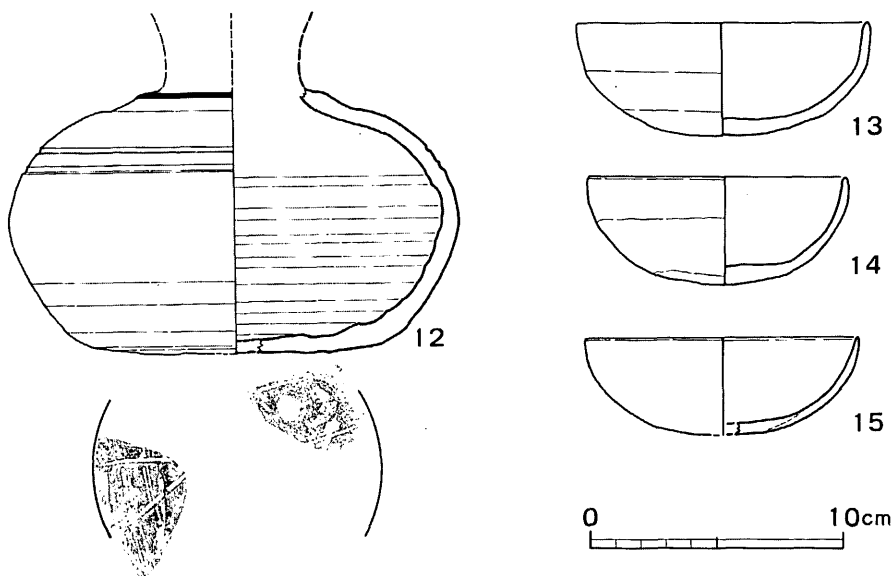


Fig. 6 杉の谷第1号墳出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/3）

石器（Fig. 7, PL. 3-1）

石鏃 表離に剝離面を大きく残し，縁辺に細かい調整が施されている。
石材はケイ質岩で流れ込みであろう。



Fig. 7 杉の谷第1号墳
出土石鏃（実大）

2 杉の谷第2号墳

墳丘 (Fig. 8・9, PL. 5-1)

比較的よく残っている円墳である。初めから墳丘の南端は林道により切られているが、墳丘頂上部に石材を抜いた跡があり、地元の帆足氏の記録に「明治前に天井石を抜いた」とあった。このように墳丘は若干変形しているが、最大14.5mという直径を測ることができた。

墳丘の盛土過程は大きく2段階に分けることができる。第1段階は石室構築における裏込め的なもので、一段ずつ強く叩きしめられながら盛り上げている。第2段階は天井部の被服と墳形を整えるもので、第1段階に比べしめりは甘い。両段階ともに褐色土と赤褐色土を交互に用いているが、墳丘北東部はこれに白味を帯びた褐色粘質土が一層加えられる。

石室 (Fig. 10・11, PL. 5-2・6・7-1)

内部主体は、主軸をN-29°-Eにとり、南西方向に開口する全長5.84mの単室・両袖型横穴式石室である。

玄室は奥幅1.9m、前幅1.93m、右壁長2.41m、左壁長2.22mで、わずかに胴の張る長方形プランを有す。壁体の構成は、奥壁2石、右壁2石、左壁3石の大ぶりの用材を立てて腰石とし、腰石から上方も比較的大きな割石を水平方向に目が通るように横積みしているが、石室上半部の石材はすでに持ち去られている。

奥壁は0.96×0.81mと0.81×0.89mという残存の石材としては最も大きなもので、その上に1～2枚の石材を横積みしている。左壁は横長の石材を腰石とし、その上に3～4枚の割石を

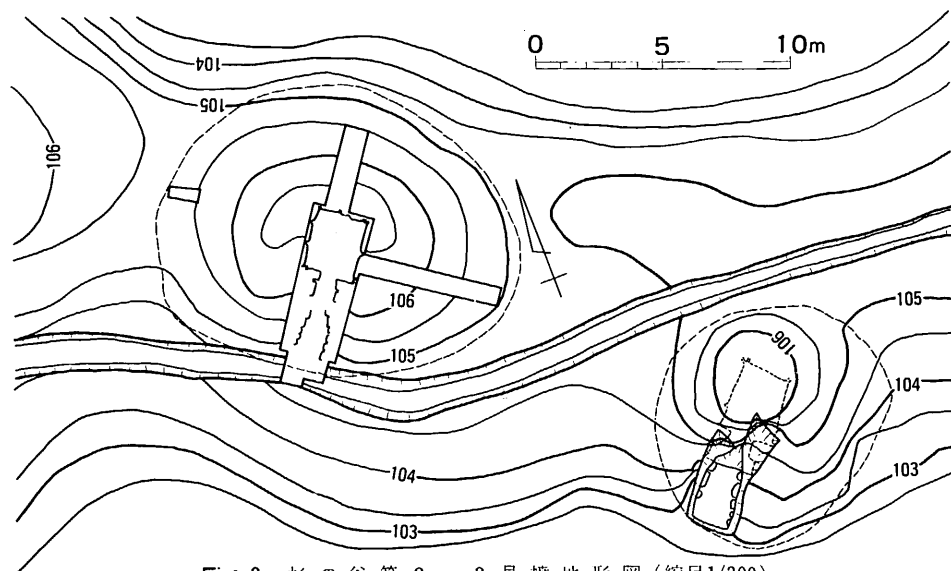


Fig. 8 杉の谷第2・3号墳地形図 (縮尺1/300)

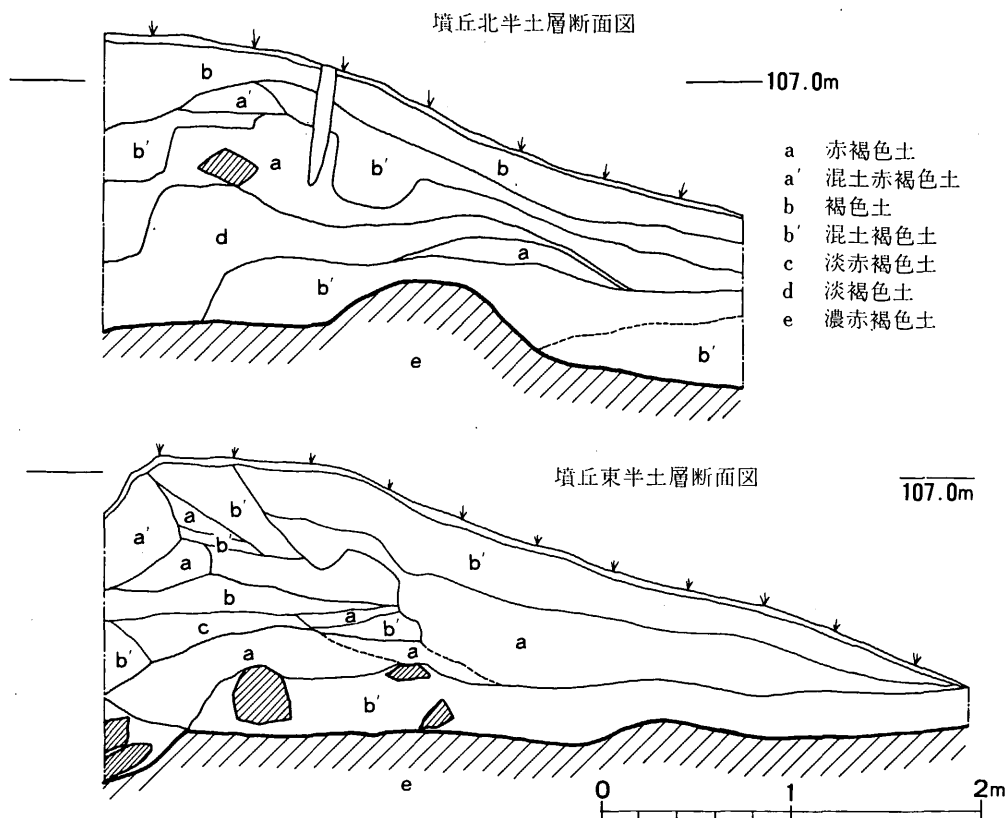


Fig. 9 杉の谷第2号墳墳丘土層断面図(縮尺1/40)

小口積みしている。右壁の3枚の腰石は玄門部側の2枚が横長に、奥壁側の1枚を縦長に据えている。腰石の上には2～3枚の比較的大ぶりの石材が小口積みされている。奥壁と左右壁との境には内側に入り込むように割石が積まれる。

玄門部は右袖がやや前方にずれる。袖幅は右袖0.62m, 左袖0.74

mを計り、さらに大ぶりの腰石の上に一枚の石材を横積みし、さらに割石をはさんで、玄門部の天井を支えている。

羨道先端部は流失しているものの、比較的良好な残りを示す。

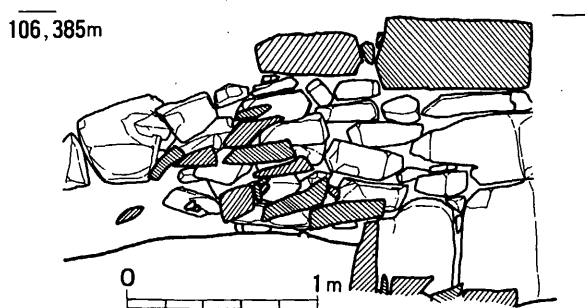


Fig. 11 杉の谷第2号墳閉塞状況(縮尺1/40)

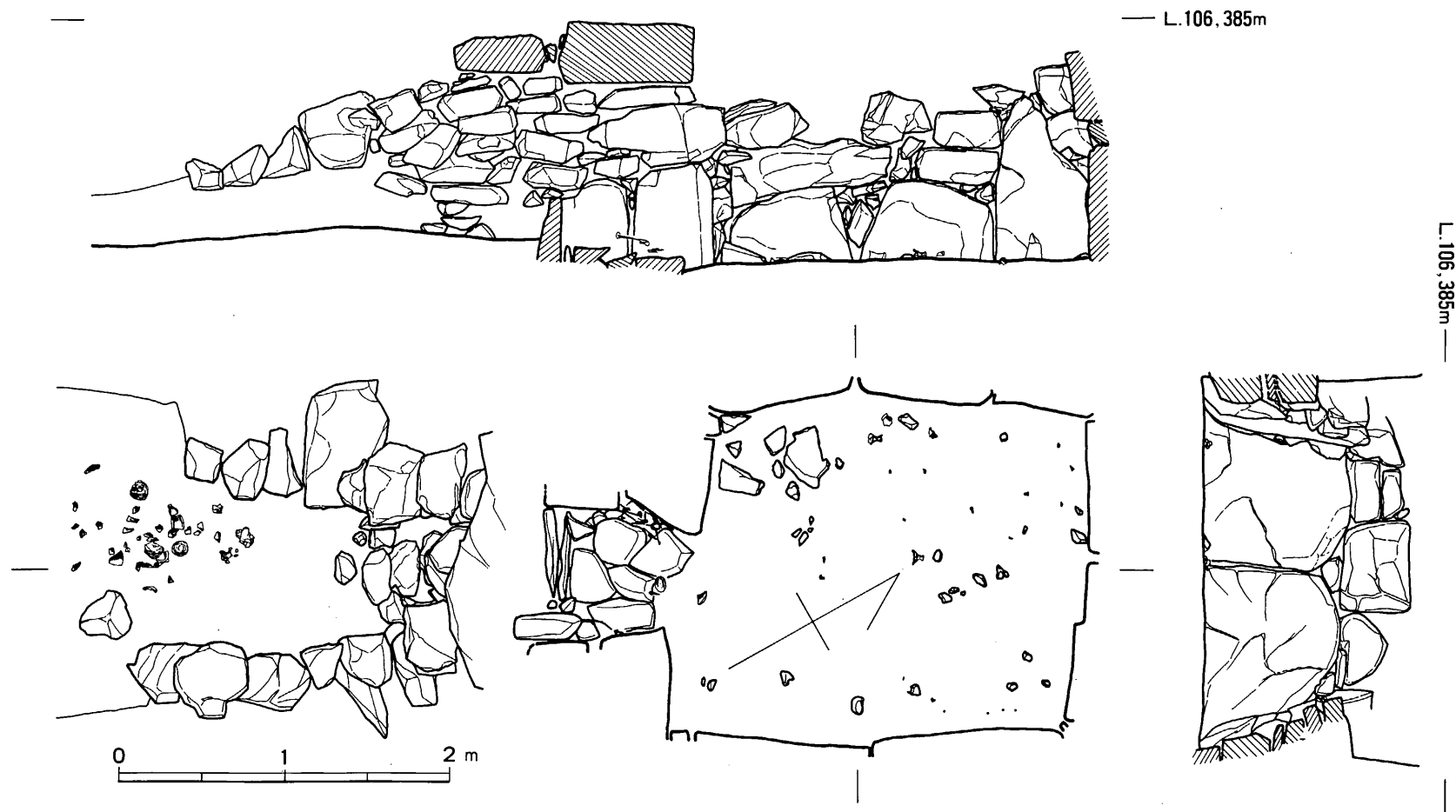


Fig.10 杉の谷第2号墳石室実測図(縮尺1/40)

羨道部腰石は縦長でその上に3～5段にわたって扁平な石材が横積みされている。壁体は玄門部付近では立ちが強いが、梱石近くではかなり内傾している。天井部は羨道部に長さ1.5m前後の天井石が残っており、この部分は床面敷石の残りも良い。梱石は奥壁より3.25mのところに配され、主軸に直行した2石よりなり、閉塞石の根石としている。閉塞石は割石を積み上げているが開口部方向にたおれている。

遺物 (Fig.12～20, PL.7-1～10)

出土状況

玄室の上半部の石材及び敷石はすでになく盗掘をうけていると考えられる。遺物の検出場所は3ヶ所に大別できる。第1は玄室内部である。玄室は相当荒されており、遺物は散乱状態であった。右壁奥に腰石と平行に4個の小玉が検出されたほか、玄室中央部より須恵器の高坏が、左壁中央の腰石近くから土師器の高坏が出土している。また帯先金具などの小鉄片が玄室のいたるところに散乱していた。玄室内の遺物はいずれも原位置を保っているとは考えられないが、小玉の動きは比較的少ないようである。第2は羨道玄門部で、左壁横に馬具や鉄鏃・刀子・小玉が、中央で鉄鏃と須恵器杯蓋・土師器碗が、さらに右壁横でも鉄鏃が検出された。中央より検出された杯蓋と碗は、ふせてある杯蓋の上に碗がかぶさっている状態で検出された。第3は前庭部であり、杯・埴・直行壺などが主軸よりやや左よりにまとまって検出された。墓前祭によるものであろう。

出土遺物

(1) 装身具	丸玉	5個
(2) 武器	鉄鏃	11本以上
(3) 馬具	轡	1式
	鉸具	2個
	兵庫鎖	1式
	帯先金具	2個
	その他	1個
(4) 工具	刀子	1本
	鉄鋤	1本
(5) 土器	須恵器	56個体
	杯(蓋・身)	36個体
	高坏	10個体
	甗	1個体
	埴	1個体

壺蓋	1 個体
直口壺	1 個体
平瓶	2 個体
提瓶	1 個体
甕	3 個体
土師器	3 個体
椀	1 個体
高坏	2 個体

丸玉 (Fig.12, PL.8-1) 長径7.9~8.8mm, 高さ5~6.5mmの陶土製のもので, 1・2は石室内より, 3は石室の入口付近から検出された。玉は胎土・焼成ともに良好で, よく磨かれている。色調は1・3が暗青灰色, 2が暗灰色を呈す。

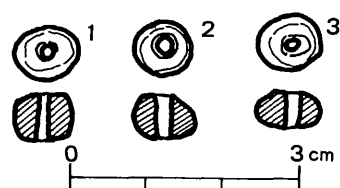


Fig.12 杉の谷第2号墳出土丸玉(実大)

鉄鏃 (Fig.13-1~17, PL.7-2) 1は透根両丸造腸袂三角形式で, 鋒部の透しは対をなす。2は透根円頭広根斧箭式, 3~5は円頭広根斧箭式, 6は圭頭斧箭式, 7は変形圭頭斧箭式で, 9・10も先端は欠失するものの斧箭式に属するものである。11は細根両丸造柳葉式に属するもので, 10も同種のものであろう。12~17は茎部である。2・8・15には木質が残り, 6・17には樹皮がまかれている。

轡 (Fig.14-18~23, PL.8-1) 18・19は楕円形素環の鏡板である。19は立聞を欠失するが, 18の立聞中央には22mm×8mmの革紐通しの透しが開けられている。20・21は引手金具で, 20の全長は14.7cmを計る。22・23は銜と思われ, 23の両端環部のとりつけは90°の角度差をもつ。

鉸具 (Fig.14-24・25, PL.8-1) 24は全長5.8cm, 最大幅5.1cmを計り, 刺金はその一端を横棒に折り曲げてとめられている。25は1/2近くが欠失するが全長7.5cm程度と思われる。

兵庫鎖 (Fig.14-26~33, PL.8-1) 兵庫鎖の一部である。一辺が7mm程度の鉄棒を曲げたもので, 一単位7.5cm前後の長さを有す。28~31はその小片と思われる。

帯先金具 (Fig.15-35・36) いずれも一端は半円形をなし中央に直径約2mmの穿孔を有す。

用途不明鉄器 (Fig.15-34) 全長32mmを計り, 断面は隅丸方形を呈す。両端は丸まり, 筒部には樹皮がまかれる。

刀子 (Fig.13-38, PL.8-1) 身部を欠失する。茎部は長さ7cmを計り, 関部には長径19mm, 短径15mmの隋円形を呈する縁金具が装着されている。

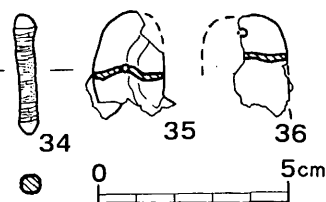


Fig.15 杉の谷第2号墳出土鉄器
実測図(縮尺1/2)

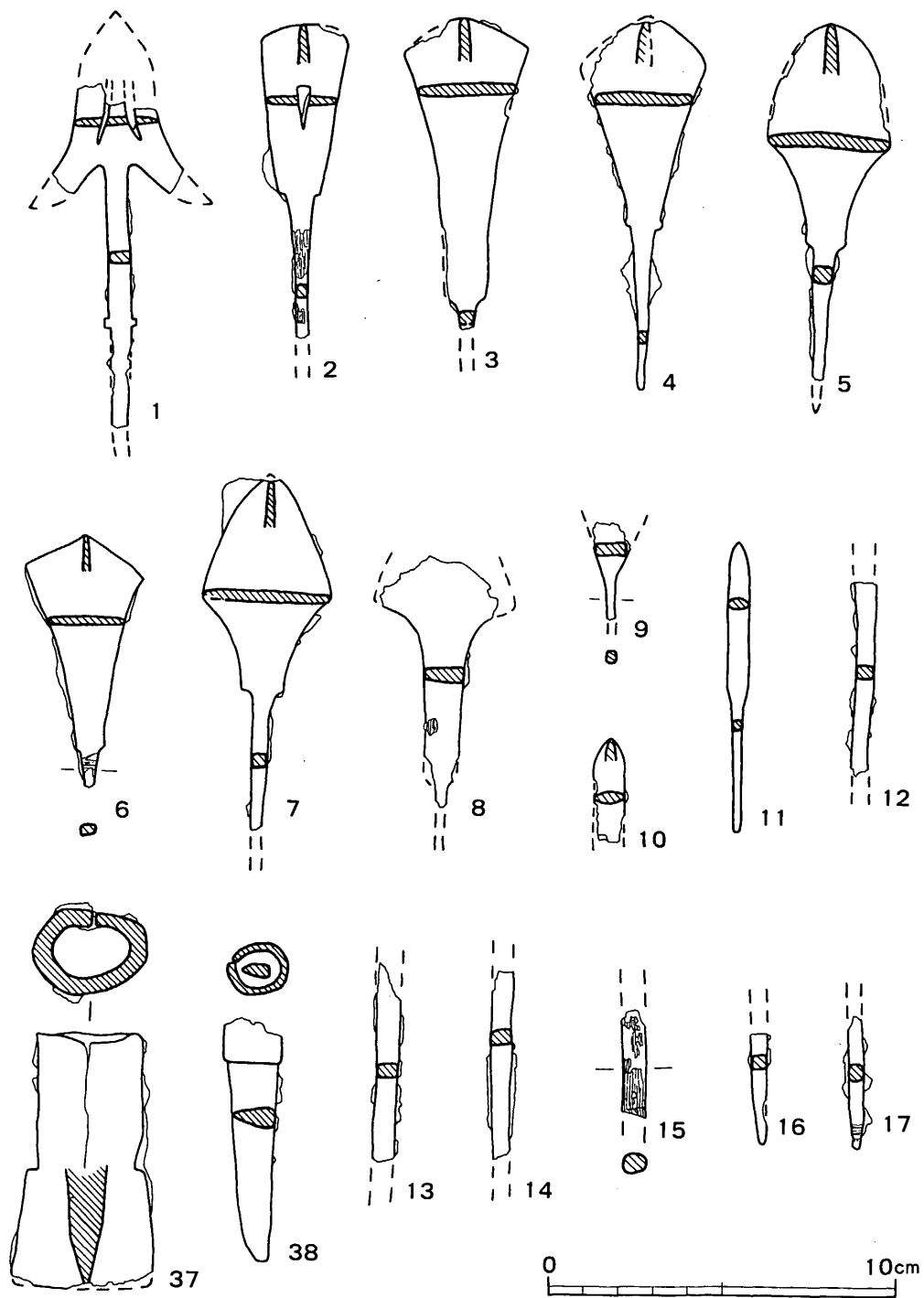


Fig.13 杉の谷第2号墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)

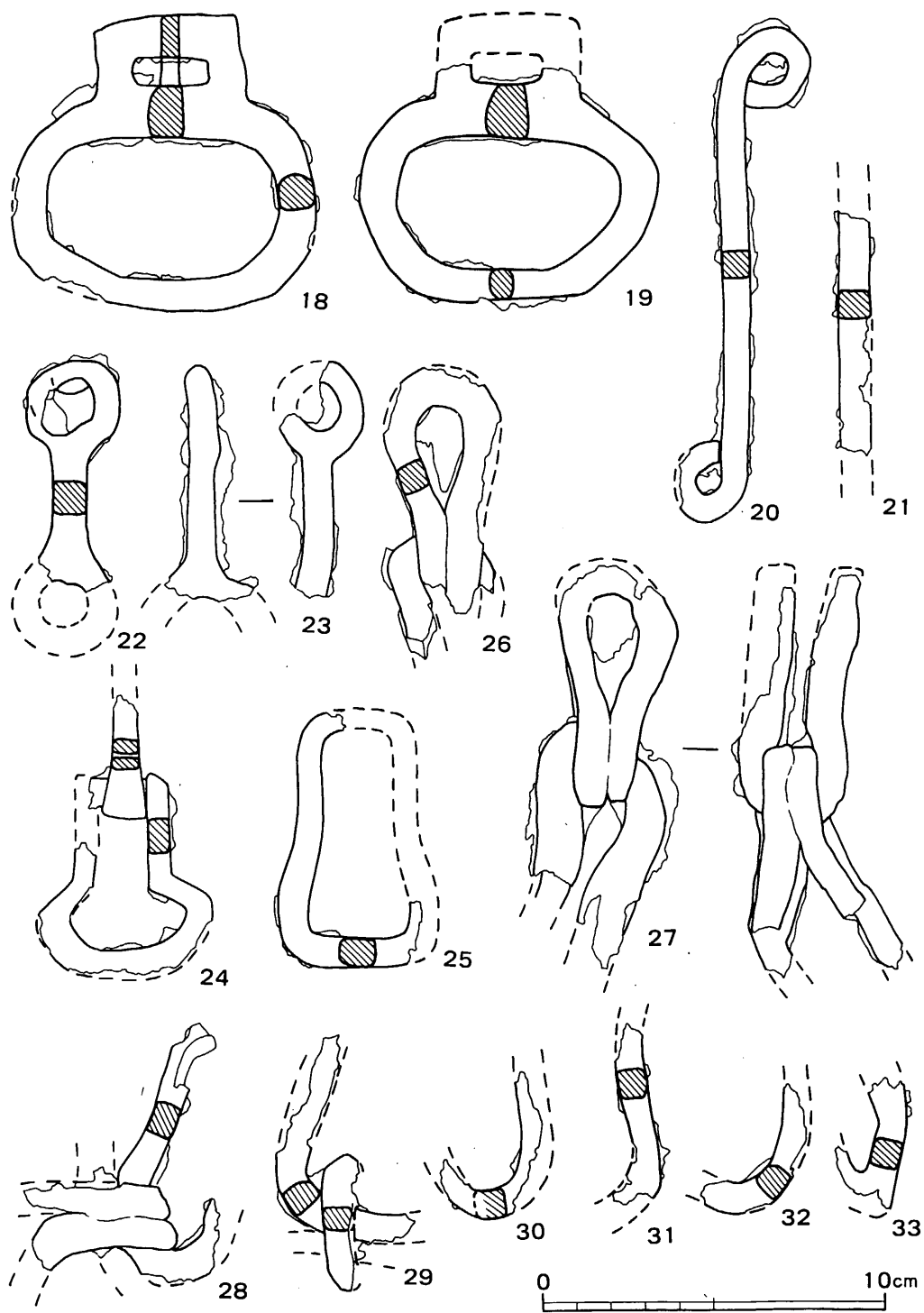


Fig.14 杉の谷第2号墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)

鉄鍬 (Fig.13-37, PL. 8-1) 全長7.5cm, 刃部幅4.1cmと小形である。装部は3.3cm×2.5cmの卵型を呈するが、内部に木質は認められない。

須恵器 (Fig.16-18, PL. 8-2-10)

杯蓋 (Fig.16-1-11, PL. 8-2-9)

I 類 (Fig.16-1-2) 1は口径13.2cmと推定される小片である。天井部と体部との境は屈曲し、弱い段状を呈す。口縁部はやや開いて立ち、先端は僅かに外反して尖り気味におさまる。端部裏面は内傾し、僅かに凹状を呈す。2は口径12.4cmと推定される。天井部と体部との境はあまく屈曲し、口縁部は直立気味である。先端は僅かに外反し端面に僅かな平坦面をもつ。端部裏面は1と同様である。調整はいずれも天井部に回転ヘラ削りが施されており、2は左廻りの走行が観察される。そのほかの部分にはナデ調整が施される。色調は淡青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

II 類 (Fig.16-3-9) 口径13.4~12cmで、口縁部が外側へ張るもの(3・4・8・9)と垂直に立つもの(5・7)がある。天井部はいずれも平坦で、丸みをもって体部・口縁部へ移行するものがほとんどであるが、直線的に移行するものもある(6・7)。端部は7がやや尖り気味におさまる以外は、丸みをもっておさまる。調整は天井部にヘラ削りが認められるが、7は手持ちによるものである。他は器面の $\frac{1}{2}$ 前後に回転ヘラ削りが施され、5・3には右廻り、8は左廻りの走行が観察され、裏面天井部に不定方向のナデが、そのほかの部位にはヨコナデ調整が施される。色調は4が灰褐色、9が茶褐色を呈するほかは青灰色を呈す。胎土・焼成はいずれも良好である。

III 類 (Fig.16-10-11) 口径は10.4cmと推定され、器高は10で3.5cmを計る。天井部から丸味をもって、開き気味の口縁部へ至る。端部は10がやや尖り気味で、裏面はあまく内傾するが、11は丸味をもっておさまる。調整は天井部に回転ヘラ削りが施され、10は器面の $\frac{2}{3}$ に右廻りの走行が認められる。裏面天井部には不定方向のナデが認められ、他はヨコナデ調整が施される。色調は青灰色を呈し、胎土はやや砂粒が多い。焼成は良好である。

杯身 (Fig.16-17-12-29, PL. 8-2-9)

I 類 (Fig.16-12-14) 口径10.2~11.2cmほどで、立ち上り高は13で1.4cmを計る。立ち上りは内傾するが、途中で屈曲して直立気味となる。端部は丸くおさまり、受部は僅かに水平または下方に引き出される。体部は丸味をもって比較的平坦な底部へ続く。色調は暗~淡青灰色を呈し、胎土・焼成は良好である。14の外面には自然釉がかかる。

II 類 (Fig.16-15-16) 口径11.4cmと推定され、立ち上り高9~10cmを計る。立ち上りは直線的に内傾する。15の受部は凹状をなし、やや上方に引き出されているが、16の受部は上方に引き出されるのみである。色調は青灰色、胎土は良好であるが、16の焼成はややあまい。

III 類 (Fig.16-17-17-29) 口径9.8~10.9cm、立ち上り高0.5~0.9cmを計る。体部から底部へ

丸味をもって移行するもの(17~21),直線的な体部から平坦な底部へ移行するもの(22~25),丸味をもった体部から平坦な底部に移行するもの(26~29)に分けることができ、それぞれa・b・cに細分する。

a類 器高3.8~4.2cmを計る。立ち上りは直線的に内傾するもの(17・19・21)と、基部が肥厚して内傾し、先端が直立気味となるもの(18・20)に分けることができる。受部はやや上方に引き出されるが、18・20は立ち上りとの境に段を有す。色調は21が暗褐色を呈するほかは青灰色を呈す。胎土は17・20・21にやや大き目の砂粒を含む。焼成は20がややあまく21は不良であるほかは、いずれも良好である。

b類 器高3.1~3.5cmを計る。立ち上りはしっかりしたもので、受部はほとんどが上方に引き出されるが、23のように水平に引き出されるものもある。立ち上りと受部との境はあまく、端部は丸くおさまる。色調は23が淡茶褐色を呈すほかは淡~暗青灰色を呈す。胎土は22がやや砂粒が多いが、焼成はいずれも良好である。

c類 器高2.8~3.3cmを計る。立ち上りはb類より微弱な感をうけ、端部はやや尖り気味である。受部はほとんどが上方に引き出されるが、28のように水平に引き出されるものもある。色調は青灰色を呈し、胎土はやや大き目の砂粒を含む。焼成は28がややあまいが、ほかは良好である。

調整は底部に回転ヘラ削りが施されており17・19・22・26には右廻り、18には左廻りの走行が観察された。また、裏面底部には一方向からのナデが加えられているほかはヨコナデ調整が施される。

高坏 (Fig.17-30~37・19-49・50, PL.9) 30・31は完形またはほぼ完形であるが、32・33は杯部、34~37・49・50は脚部の破片である。30は口径8.8cm,脚裾径8.1cm,器高9.7cmを計る。杯部は直立または外反気味に立ち、端部はやや尖り気味となる。底部はカキ目調整が施される。脚部はゆるやかなカーブを描いて外反する。色調は暗青灰色を呈し、胎土・焼成は良好である。31は口径9.8cmと推定され、脚裾径6.9cm,器高10.2cmを計る。杯部は碗状を呈す。基部に段を有し、端部にかけて大きく開く。色調は淡褐色を呈し、胎土は良好であるが、焼成は不良である。32・33は体部がやや外傾し、端部はやや尖り気味である。体部と底部との境に32は一条、33は二条の沈線がはいり、32の底部には櫛状工具による斜線の施文を挟み、さらに一条の沈線がめぐる。色調は32が濃青灰色、33が淡青灰色を呈し、胎土・色調はともに良好である。34・49・50は大形のもので有蓋高坏であろう。34はゆるやかにカーブを描き、端部は短かく立つ。表面には3本以上の沈線がめぐり、その間にカキ目調整が施され、裏面にはシボリ痕を残す。49は杯部にカキ目調整が施され、脚部裏面にわずかにシボリ痕が残る。50は杯部にカキ目調整が施される。脚部は端部に向かって大きく外開し、端部は下方にわずかに引き出される。色調は灰色~淡褐色を呈し、焼成が十分ではない。35~37は小形のもので脚裾径7cmを計る。カキ

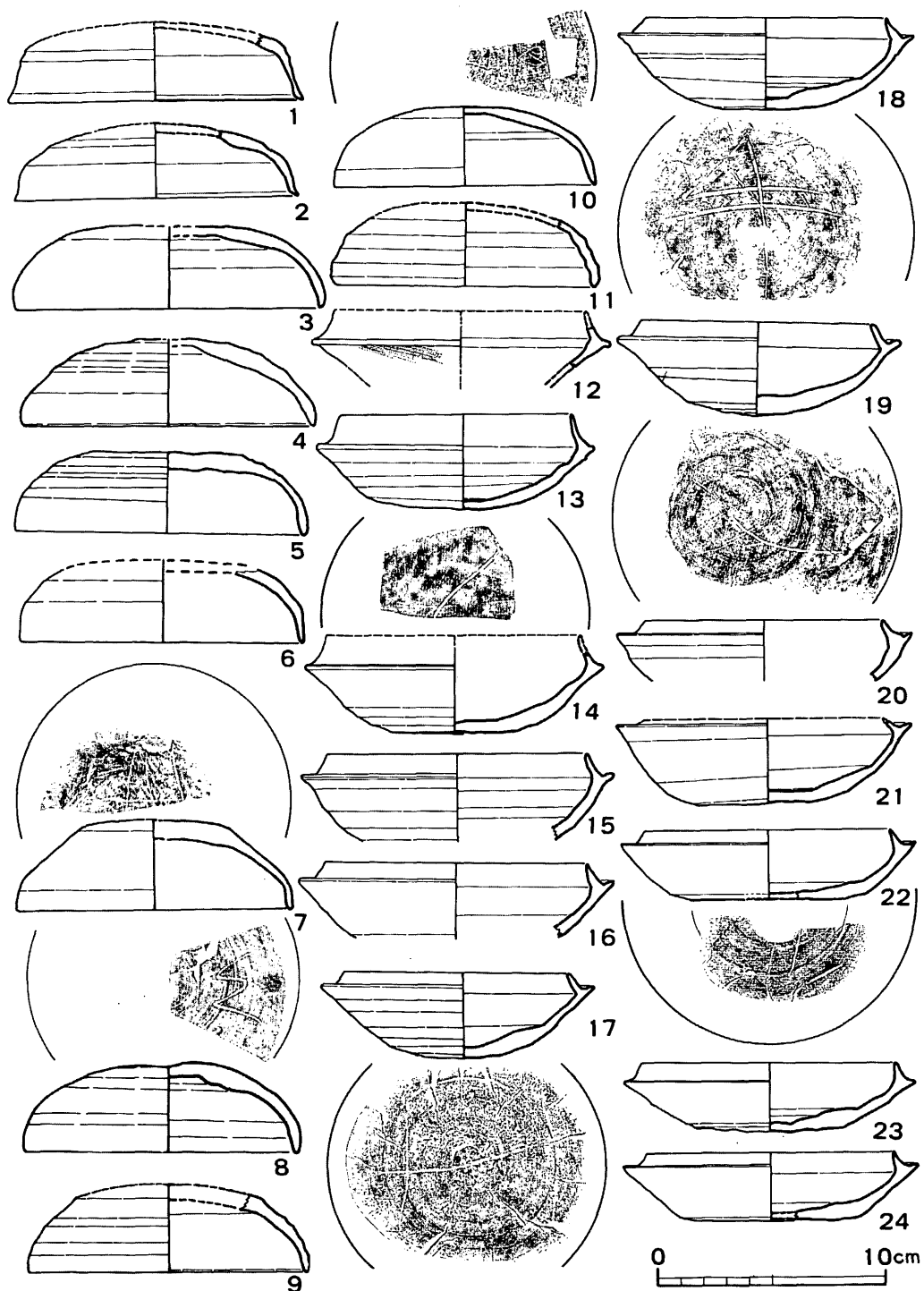


Fig.16 杉の谷第2号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

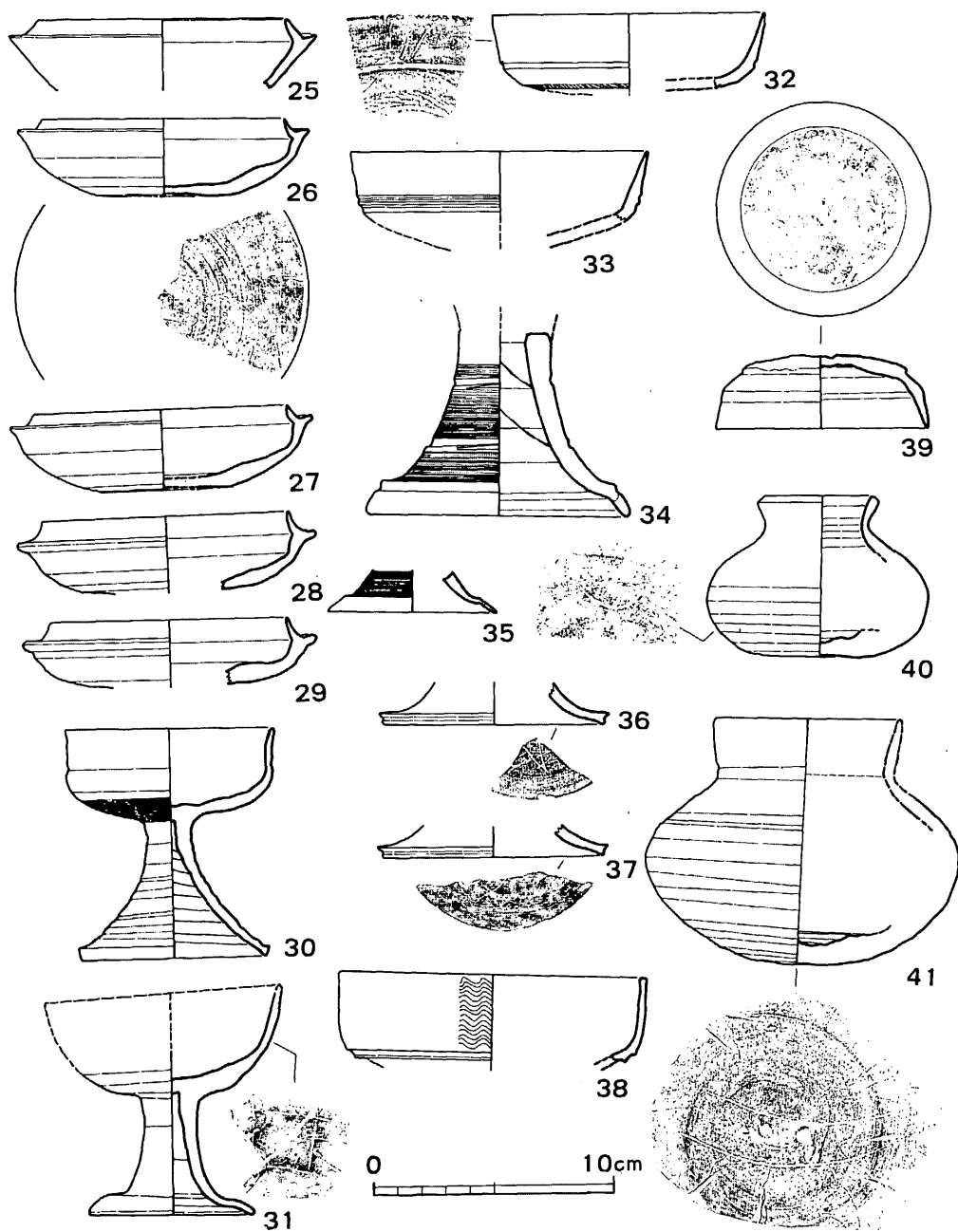


Fig.17 杉の谷第2号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

目調整をうけた脚は裾部近くで屈曲し、下方へ引き出される。36・37は脚裾径9.6cmを計る。裾部近くで強いカーブを描き外開し、端部は凹状をなす。色調は青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

甗 (Fig.17-38) 口縁部はわずかに外傾し、櫛描き波状文が施される。頸部との境には2本以上の沈線がはいる。色調は青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

埴 (Fig.17-40, PL.10) 口径5.1cm, 器高6.7cmを計る小形の完形品である。口頸部は短く外反し、体部はその中ほどに最大径(9.2cm)をもつ。

壺蓋 (Fig.17-39, PL.10) 口径8.8cm, 器高3cmを計る。平坦な天井部と体部の境には段をもち、体部は屈曲した後、やや外傾して口縁部に至る。天井部は手持ちによるへう削りが行われる。色調は青灰色、胎土はやや砂粒が多く、焼成もあまい。

直口壺 (Fig.17-41, PL.10) 口径7.1cmと推定され、器高は10.1cmを計る。口頸部は直線的にわずかに外傾し、体部中ほどに最大径をもちタマネギ状を呈す。底部には右廻りの回転へう削りが施されている。

平瓶 (Fig.18-42・43, PL.10) 42は口径6.3cmと推測され、器高13.1cmを計る。口頸部は漏斗状をなし、体部中心をややずれて取り付けられる。体部はやや上位に最大径をもち、肩部には2本の沈線が走るが意識的なものかどうかは疑しい。底部はやや上げ気味になる。調整は体部下半にカキ目調整が僅かに認められ、底部には手持ちによるへう削りが施されている。43は口頸部を欠失しているが、体部の中心より外されて取り付けられている。体部より底部にかけて全面にカキ目調整が施され、底部は平坦である。いずれも灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。44は大形の瓶の破片で平瓶か、提瓶か明瞭でない。底部に回転へう削りが施されており、さらに底部、肩部にカキ目調整が僅かに認められる。色調は淡灰色、胎土は良好であるが、焼成は不良である。

提瓶 (Fig.18-45, PL.10) 口径7.8cm, 器高15.8cmを計る。口頸部は外反し、端部は鋭く肥厚して、一条の凹線がめぐる。体部前面の張り出しはゆったりとした丸味をもち、器面にはカキ目調整後、櫛目の刺突文が同心円状にめぐる。また、体部背面もへう削りの上にカキ目で調整を行っている。

甕 (Fig.18-46・48) 48は口径8.4cmを計る。小形甕の口縁部で、端部は凹状をなす。46は口径13cmを計る小形甕の口頸部で、口縁部は大きく外開する。端部は上・下に2条の凹線が走る。47は口径25.5cmを計る口頸部の破片で、口頸部は短く外反する。端部は外面に肥厚して、そこに一条の凹線がめぐる。色調は48が褐色、46・47が青灰色を呈すが、胎土・焼成はいずれも良好である。

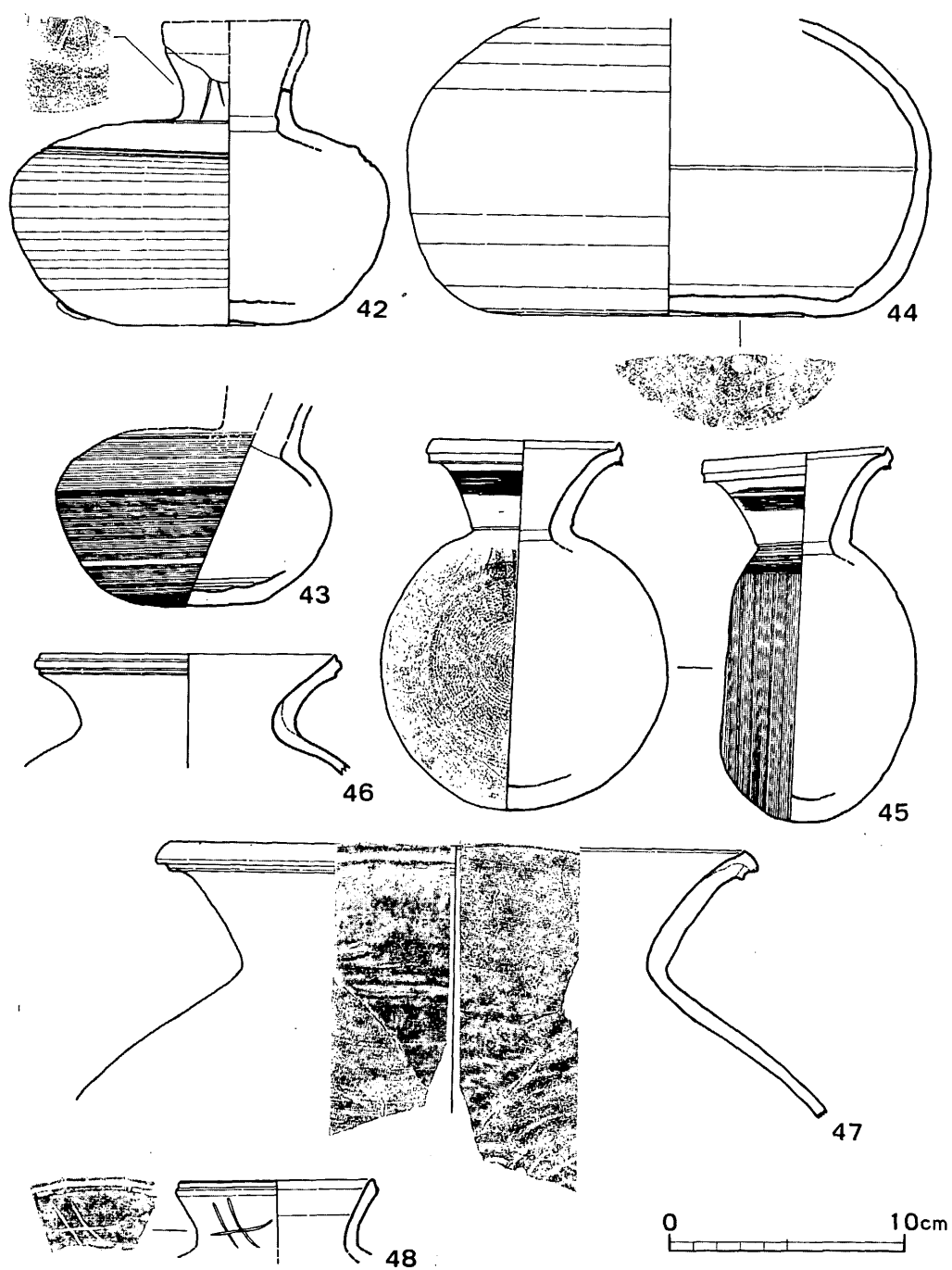


Fig.18 杉の谷第2号墳出土須恵器実測図（縮尺1/3）

土師器 (Fig.19-51~54, PL.10)

椀 (Fig.19-51, PL.10) 口径10.8cm, 器高4.2cmを計る半球状を呈するものである。色調は赤褐色で、焼成はややあまい。

高坏 (Fig.19-52~54) 52は口縁部の小片で、体部と底部の境で屈曲し稜をなすものである。53も口縁部の破片で、体部はゆるく外反し、横ナデの痕を強く残す。54は杯部と脚端部を欠失する。脚筒部はほぼ直線的に延び、裾部で大きく外開する。器面外面は縦方向のへラ削りを行い、内面にはシボリ痕を残す。

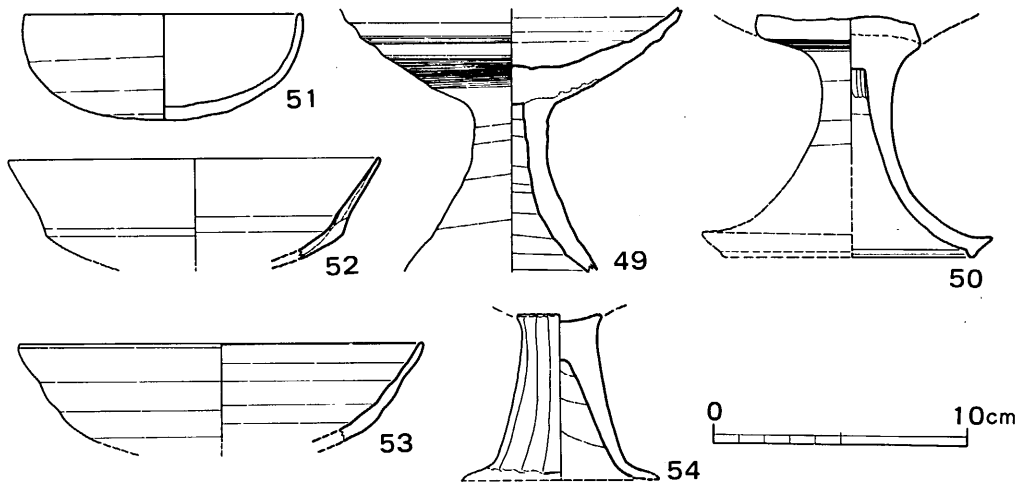


Fig.19 杉の谷第2号墳出土須恵器土師器実測図 (縮尺1/3)

石器 (Fig.20, PL.8-1) 尖頭状石器で長さ8.5cm, 幅6.6cmを計る。横長の不定形剥片を利用したもので、腹面に主要剥離面を大きく残す。調整は粗雑で、背面は縁部から中央に向って二次加工が施されるが、縁部は両面より調整され刃部をつくり出している。石材はサヌカイト製である。流れ込みの遺物である。

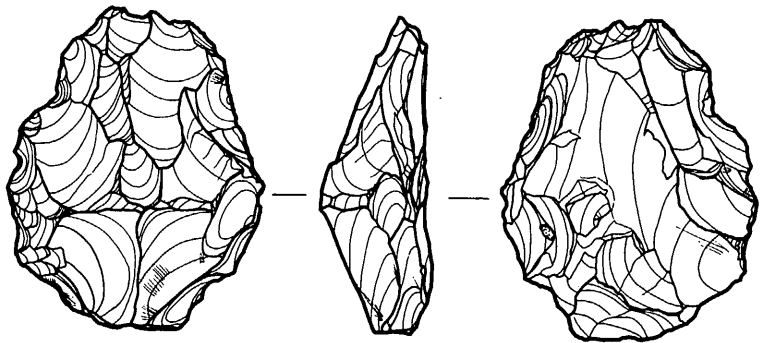


Fig.20 杉の谷第2号墳出土石器実測図 (縮尺1/2)

3 杉の谷第3号墳

墳丘 (Fig. 8, PL.11-1)

墳丘は丘陵の尾根よりやや下った斜面にあるため若干流されてはいるが比較的よく墳丘を残している。墳丘は最大9.8mを測る円墳である。

本墳はすでに開口し、また墳丘南側より玄室天井部にぬける盗掘口があげられている。

石室 (Fig.21, PL.11-2)

内部主体は、主軸をN-44°-Eにとり、南西方向に開口する全長6.2mの複室・両袖型横穴式石室で、石室はほぼ完形に近い。

玄室は奥幅1.81m、前幅2.21m、右壁長2.52m、左壁長2.75mで、奥壁側がすばまる台形様プランをもつ、壁体は奥壁1石、左・右壁各2石の大ぶりの用材を立てて腰石とするが、奥壁と左・右壁の奥壁側の腰石は幅1.7~2m、床面よりの高さ0.92~1.15mを計る大きな石材を使用する。腰石上の一段目も左右壁玄門部の腰石と同程度の大ぶりの石を積み、二段目より上はいくぶん小さ目の石材が水平方向にほぼ目が通るように横積みされている。奥壁はゆるやかに内傾し、天井近くで持ち送られる。玄門部は右袖で高さ1.15m、左袖で1.43mの方柱状石を用いている。玄門の幅は梱石上で98cmを計る。梱石は1個で最大幅19cmの石を玄門間いっばいに置き、床面下に深く埋め込んでいる。

前室は梱石から前門部まで1m、奥幅1.73m、前幅1.84m、右壁長0.59m、左壁長0.72mの長方形を呈する。左右壁腰石は玄室の玄門側腰石と同程度のものを使用している。壁体はやや内傾して上り、天井で極端に突出する。前室には敷石が敷きつめられている。前門部は石袖50cm、左袖55cm前室側壁より張り出して、玄門袖石よりやや小さ目の方柱状石を用いている。この袖石間にはやや大き目の石が重なっており、閉塞石としていたものと考えられる。壁体には比較的大ぶりの石材が用いられている。

遺物 (Fig.21~24, PL.12)

出土状況

墳丘はすでに開口し、玄室天井には盗掘口があげられており、盗掘が行われている。また、戦争中ばくち場に用いられたという話もあり、検出された遺物の量は少なかった。玄室からは遺物の出土はみず、前室右側に鉄器の集中がみられ、馬具・直刀・鉄斧・鉄鎌が出土した。また石室入口付近では土器が検出された。

出土遺物

- | | | |
|--------|----|-----|
| (1) 武器 | 直刀 | 1 振 |
|--------|----|-----|

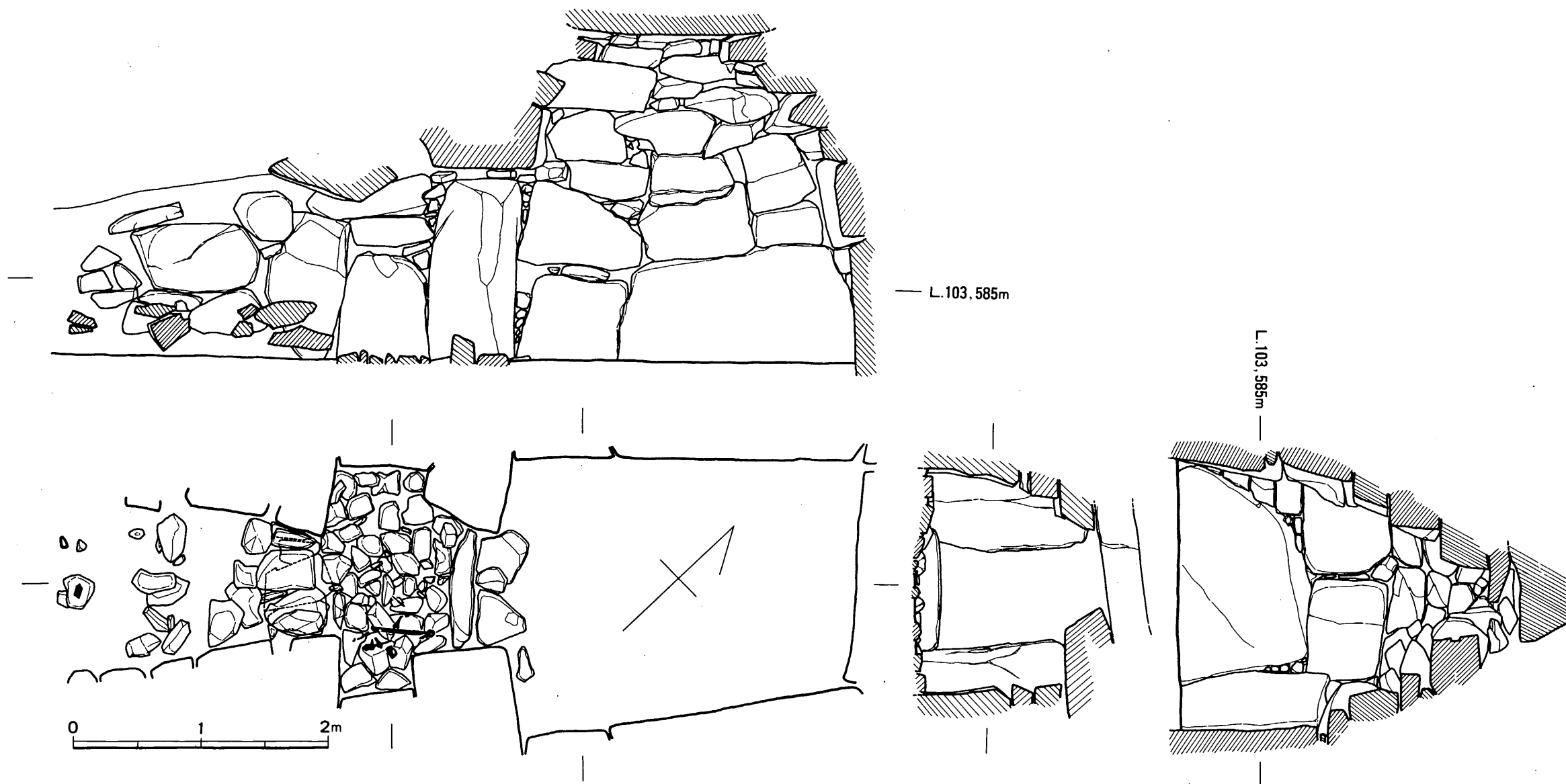


Fig.21 杉の谷第3号墳石室実測図(縮尺1/40)

- | | | |
|--------|-----|------|
| | 鉄鏃 | 4本 |
| (2) 馬具 | 轡 | 2組 |
| | 鉸具 | 1～2個 |
| | その他 | |

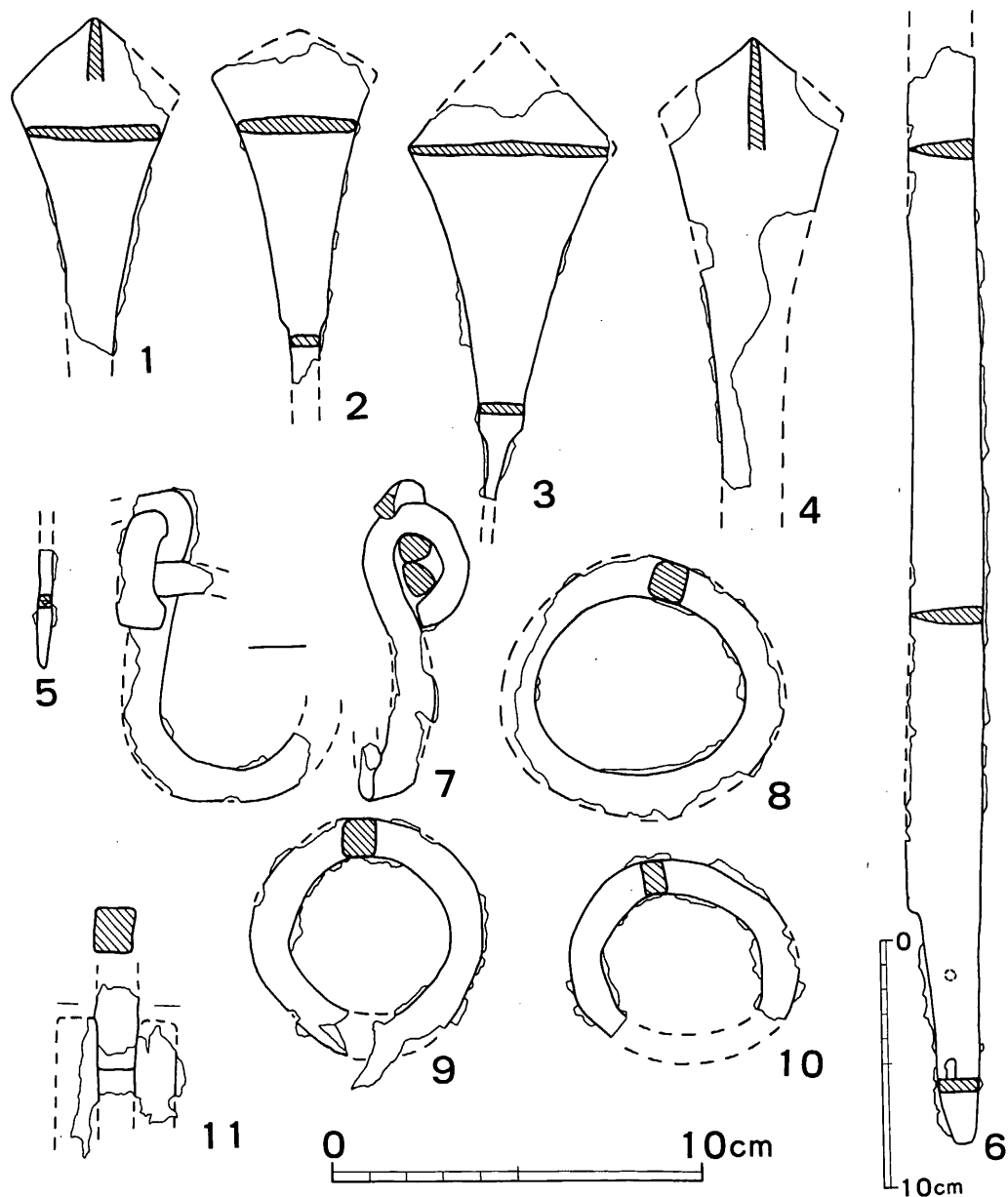


Fig.22 杉の谷第3号墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)

- | | | |
|---------|---------|------|
| (3) 工 具 | 刀子 | 2 本 |
| | 鉄斧 | 1 個 |
| (4) 土 器 | 須恵器 | 7 個体 |
| | 杯 (蓋・身) | 5 個体 |
| | 甕 | 2 個体 |

直刀 (Fig.22-6, PL.12-3) 身部の先端を欠。残存長は44.5cm, 身幅2.7~3.3cm, 背幅7mm 前後を計る。基部は幅2.2cm, 厚さ7mmを計り, 関部より3.5cmの所に直径4mmの目釘が残る。

鉄鏃 (Fig.22-1~5, PL.12-1) いずれも圭頭広根斧箭式に属するものである。

轡 (Fig.22・23-8~20, PL.12-2) 8~10は立聞のない素環の鏡板である。8は直径7cm前後のやや楕円形に近い形態を呈す。9・10は直径6~7cmを計る。形態は正円に近くセットをなすものと思われる。12~20は引手金具, または銜である。

鉸具 (Fig.22-11) 破損が著しい, 刺金はその一端を横棒に折り曲げてとめられている。

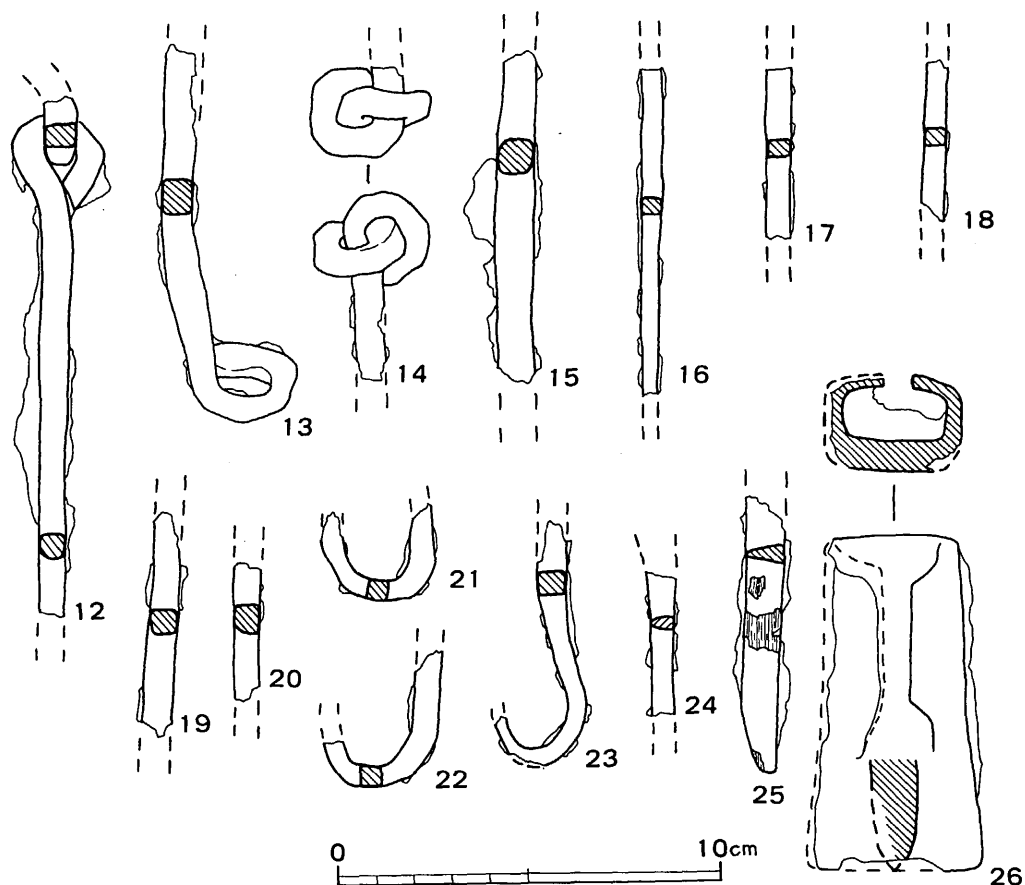


Fig.23 杉の谷第3号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

兵庫鎖 (Fig.23-21~23, PL.12-2) 兵庫鎖の小片である。

用途不明鉄器 (Fig.22-7, PL.12-2) U字状に曲げられた断面方形の鉄棒状のもので、さらに端部は丸く曲げられ、引手金具と思われる一端が連なる。

刀子 (Fig.23-24・25, PL.12-2) いずれも基部であり、身幅が25で1cm、26で6mmを計る。

鉄斧 (Fig.23-26, PL.12-2) 袋状を呈す、全長9cm、刃部長4.6cm程度のものである。袋部は3.6×2.6cm程度の方角を呈す。

須恵器 (Fig.24)

杯蓋 (Fig.24-1・2)

Ⅱ類 (Fig.24-1・2) 1は口径12.2cmと推定され、器高は4.1cmを計る。体部は途中で外側に屈曲し、口縁部はやや開き気味である。端部は丸くおさまり、裏面は体部から天井部まで直線的に移行する。2は口径11.6cmと推定され器高は3.7cmを計る。天井部からゆるやかなカーブを描いて口縁部へ至り、端部は丸くおさまる。裏面天井部は不定方向のナデ、その外の部位はヨコナデ調整が施される。色調は1が灰色、2が青灰色を呈し、胎土はいずれもやや砂粒が多い。焼成は良好である。

杯身 (Fig.24-3)

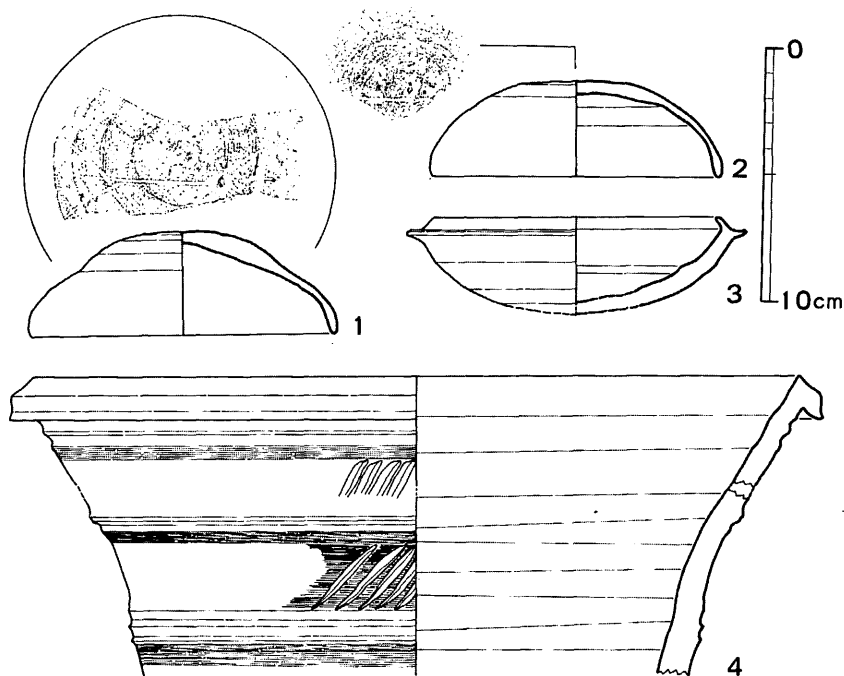


Fig.24 杉の谷第3号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

Ⅱ類 (Fig.24-3) 口径11.2cm, 器高4.8cmと推測される。立ち上り高は0.5cmと短く、内傾し、端部はやや内湾する。受け部は水平もしくは、やや上り気味に細く引き出される。受け部と体部の境は比較的明瞭で、体部から底部まで丸味をもって移行する。整形は底部に回転ヘラ削りが器面 $\frac{1}{2}$ 強の範囲に施されている。色調は暗青灰色、胎土・焼成は良好である。

甕 (Fig.24-4) ゆるやかに外反する口頸部の破片で、口径は32cm程度と推測される。口縁端部は下方に肥厚し、整形の際に有段化される。頸部には3ヶ所に沈線が施され、うち上・下2個所は2条、中は1条の沈線よりなる。沈線に挟まれた2帯に平行条線が附されている。そのほかに表裏にタタキ目をもった胴部片も若干出土をみている。

Ⅳ ま と め

杉の谷古墳群1～3号墳は、1号・3号墳が複室両袖型、2号墳が単室両袖型の横穴式石室を内部主体とするものである。先に分類した杯はⅠ類＝Ⅲb様式、Ⅱ類＝Ⅲb～Ⅳ様式、Ⅲ類＝Ⅳ様式、Ⅳ類＝Ⅵ様式に比定でき、造営年代は2号墳が最も古く6世紀後半と考えられ、7世紀初頭まで追葬が行われていたものと思われる。1号・3号墳は時期を確定できる須恵器の出土がわずかで明瞭でないが、出土した最も古い須恵器は第Ⅳ様式のものであり、古墳築造場所よりみる限り、2号墳の年代より上ることはないであろう。さらに1号墳は3号墳より低位の急な斜面に構築され、須恵器もやや新しい様相を帯びており、時期的に3号墳と近似するものの、やや新しいと考えられる。また1号墳は前室に第Ⅵ様式の杯が副葬されており、7世紀後半に再利用されている。

宮地岳西麓に築かれた古墳群は北より、杉の谷・阿志岐・天山の古墳群がある。中でも阿志岐古墳群(註1)は大きくA～D群に分けられ、A群3号墳(註2)は竪穴系横口式の石室をもっていることが明らかとなった。このことは比較的長い間に渡り、この山陵に古墳が造営されていたと思われる。しかし、これらの古墳の造営時期の差、構築地の占有といった問題はまた明瞭でなく、これらの古墳を造営した人々の居住地・生産基盤を含め、今後の課題としなければならないであろう。

各古墳出土の須恵器に附されたヘラ記号を記したのがFig.25である。発掘調査を実施した3基の古墳は、いずれも盗掘をうけており出土した資料は断片的なものでしかない。しかし、ヘラ記号が所謂「窯印」として銘記されたのではないことは既に先学の立証されたところであるが、結果的には生産地同定の重要な手懸りの一つとなるという石山勲氏(註3)の指摘は肯首されるところであり、本古墳出土の須恵器に附されたヘラ記号についてみてみたい。

1号墳より出土した2～7の附された須恵器は形態や手法が類似し、同一窯・同一工人によるものと考えられるが、「副葬に際して、一定数の杯を同一窯よりもたらしただけであろう」(註4)か。23・24は同じ平瓶の肩部と底部に附されていたもので、石山氏のいう「口頸部と胴部とを別途製作する大形器種にあたっては、接合の際の目印とする」(註3)へう記号が残ったものであろう。2号墳より出土した8、3号墳より出土した15は平田窯A地点1号窯(註5)中に類似するものをみることができる。周辺で同窯出土の特徴的な $\rightarrow\leftarrow\cdot\leftarrow$ に類似するものをみても、杉塚廃寺(註6)・剣塚11号住居跡(註7)出土の杯にみられるが、ほかに観音山14号墳(註8)出土の壺に15と同種のものもみられる。これについては器種が異なり、いまだへう記号の意義が明確でない現在、同一窯として認知できるか疑問であるが、石山氏想定のように製作にあたる工人が複数であったとすれば、大形甕等の技術的に異なるもの以外は同一窯(同一グループ)で製作しても不自然ではない。そのほかに2号墳出土の9は、八隈4号墳のものと類似し、さらに八隈4号墳(註4)出土のへう記号中に平田窯B地点1号窯との類似が示されているものがあり興味深い。このように当古墳群出土のへう記号にはかなり平田窯との類似がみられ、そのほかのものも牛頸地区からの供給が中心であったと考えられる。

註1 筑紫野市教育委員会編 遺跡分布調査

2 筑紫野市教育委員会編 「阿志岐シメノグチ遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972

3 福岡県教育委員会編 石山勲 「鈴ヶ山・山の前面古墳群出土須恵器にみられるへう記号について」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ 1972

4 福岡県教育委員会編 酒井仁夫 「古墳群の調査」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ 1976

5 雄山閣 坂詰秀一編 「筑前平田窯跡」 1969

6 昭和54年度、筑紫野市が行った杉塚廃寺の調査で、同寺基壇下より出土した。15と同種のものであるが、杯身でへう記号も書き順・描き方が異なる。

7 福岡県教育委員会編 石山勲 「第11号住居」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIV 上 1978

8 福岡県教育委員会編 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第5集 1978

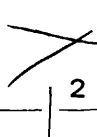
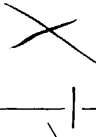
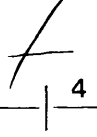
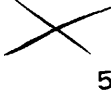
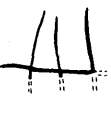
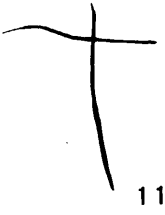
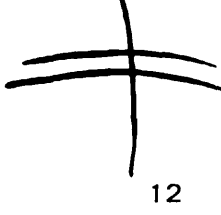
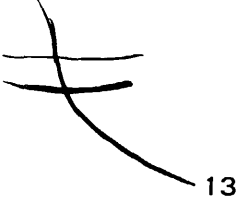
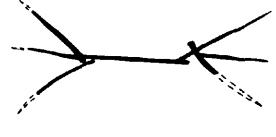
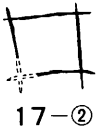
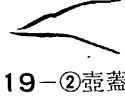
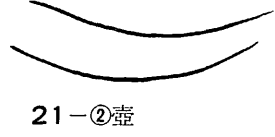
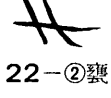
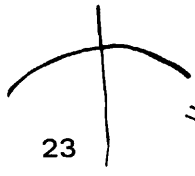
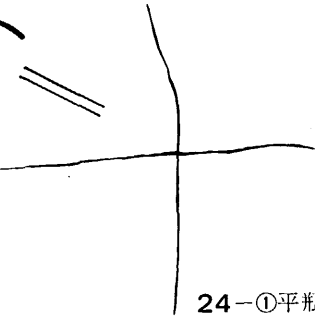
一 号 墳	杯蓋	  				
	杯身	   				
二 号 墳	杯蓋	  				
	杯身	   				
三 号 墳	杯蓋		高 杯	  		
	杯身					
そ の 他	杯蓋	 				
	杯身	   				

Fig.25 杉の谷古墳出土須恵器ヘラ記号 (縮尺1/3)

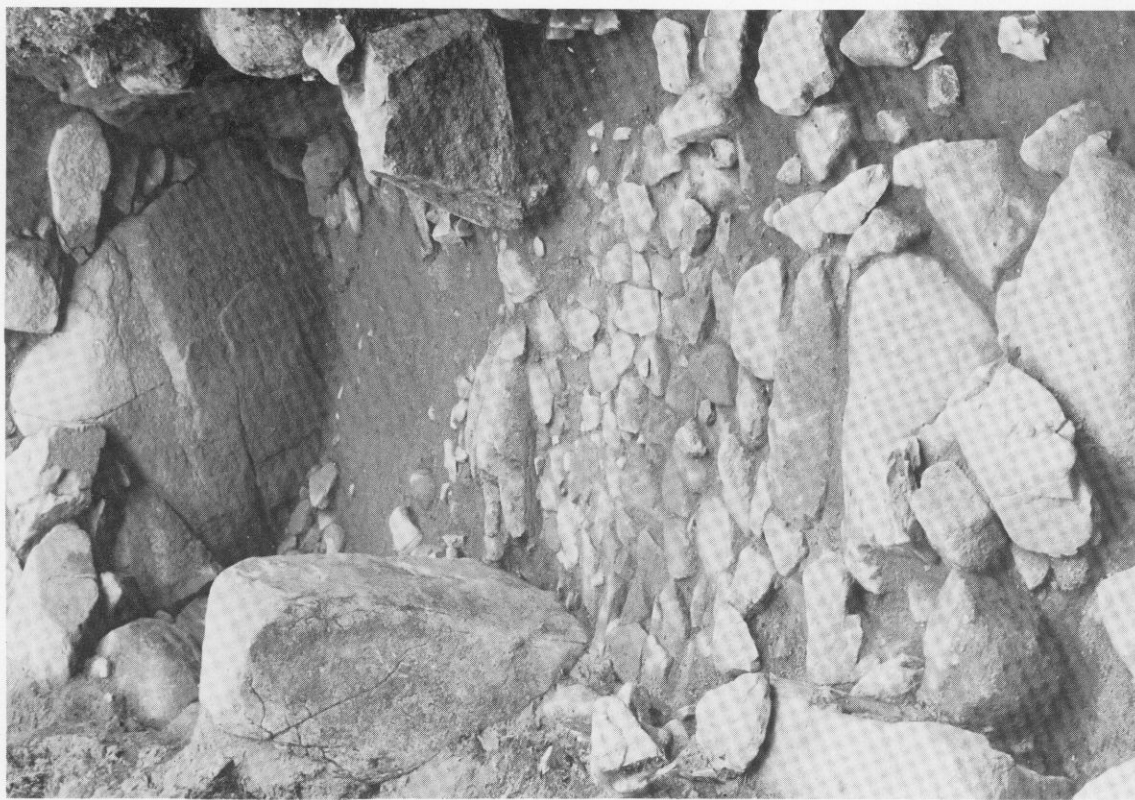
○中の数字は古墳の番号を示す

PLATES

(杉の谷古墳群)



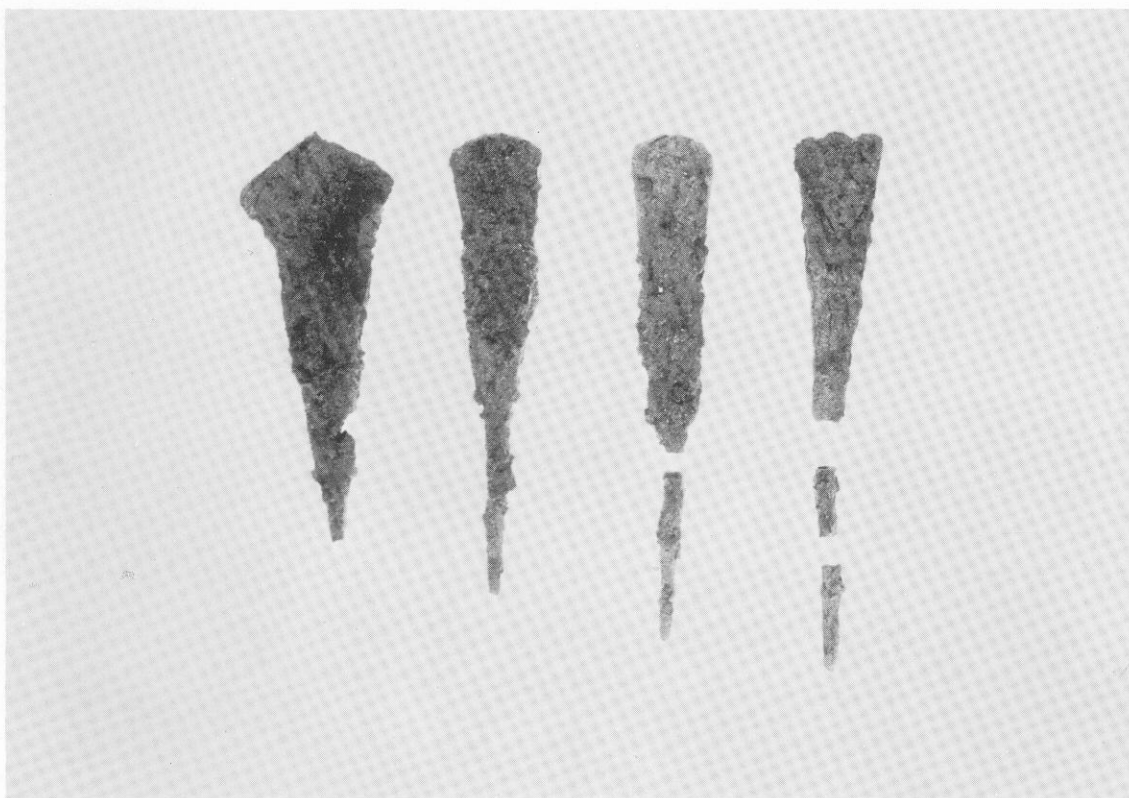
(1) 杉の谷古墳群遺跡遠景写真(北西より)



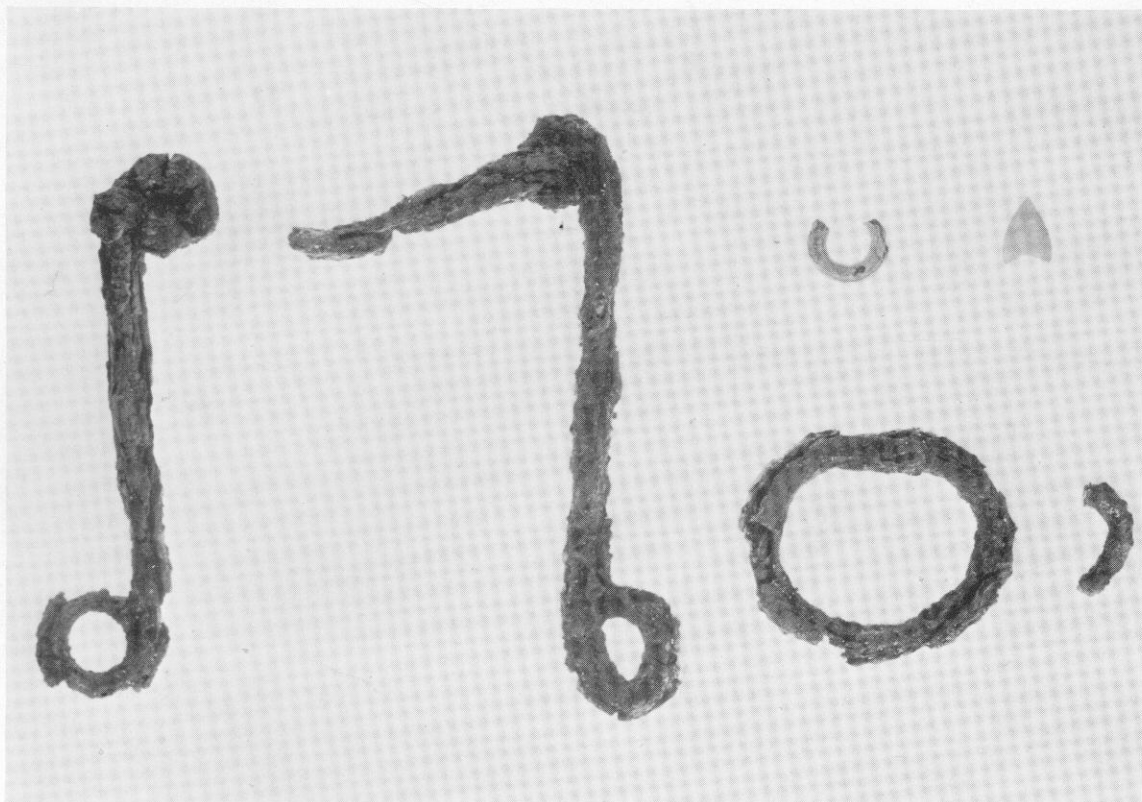
(2) 杉の谷第1号墳石室全景



(1) 杉の谷第1号墳前室遺物出土状況



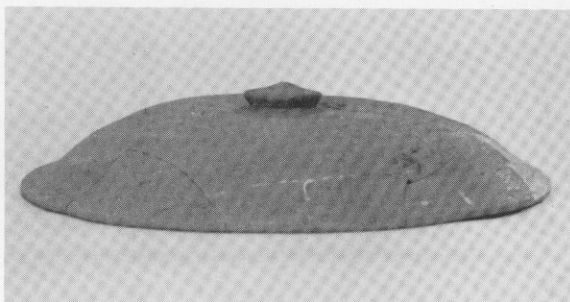
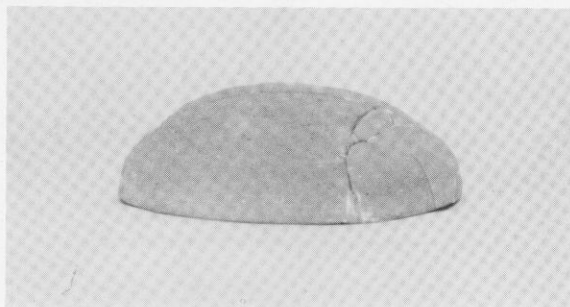
(2) 鉄鏃



(1) 馬具・金環・石鏃



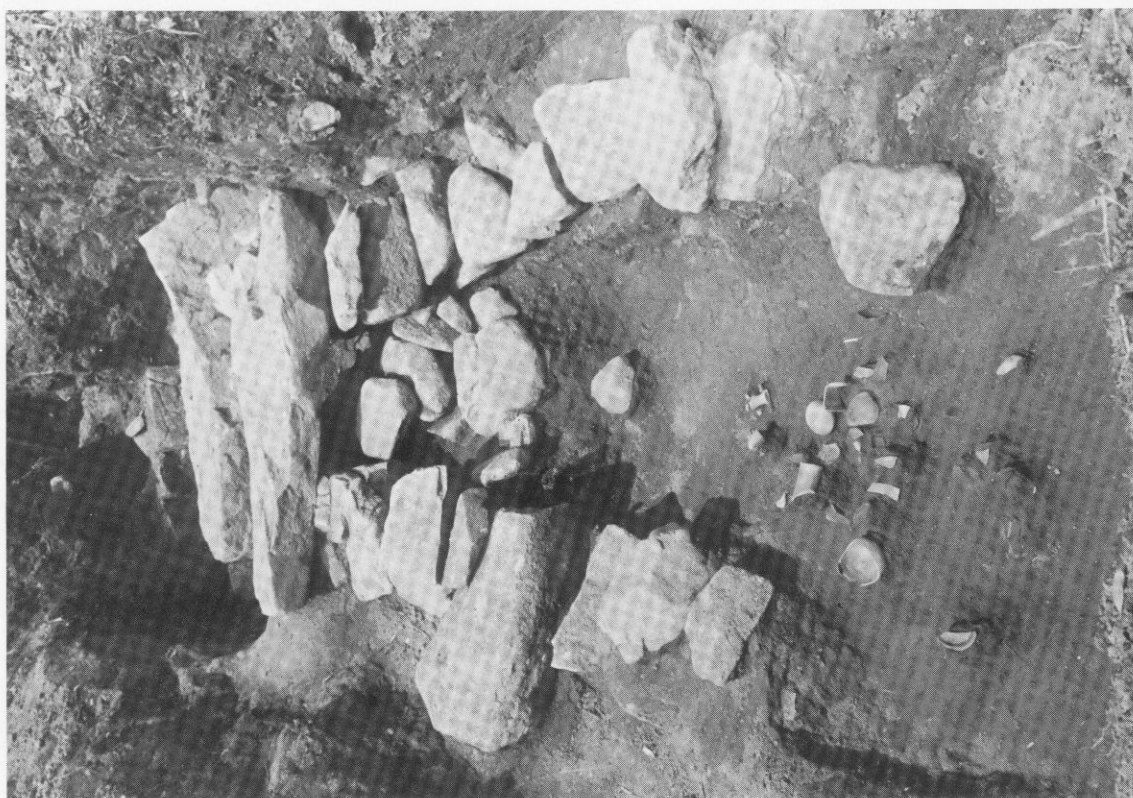
(2) 須恵器



(1) 須恵器・土師器



(1) 杉の谷第2号墳近景



(2) 杉の谷第2号閉塞状況・前庭部遺物出土状況



(1) 杉の谷第2号墳石室(羨道部)



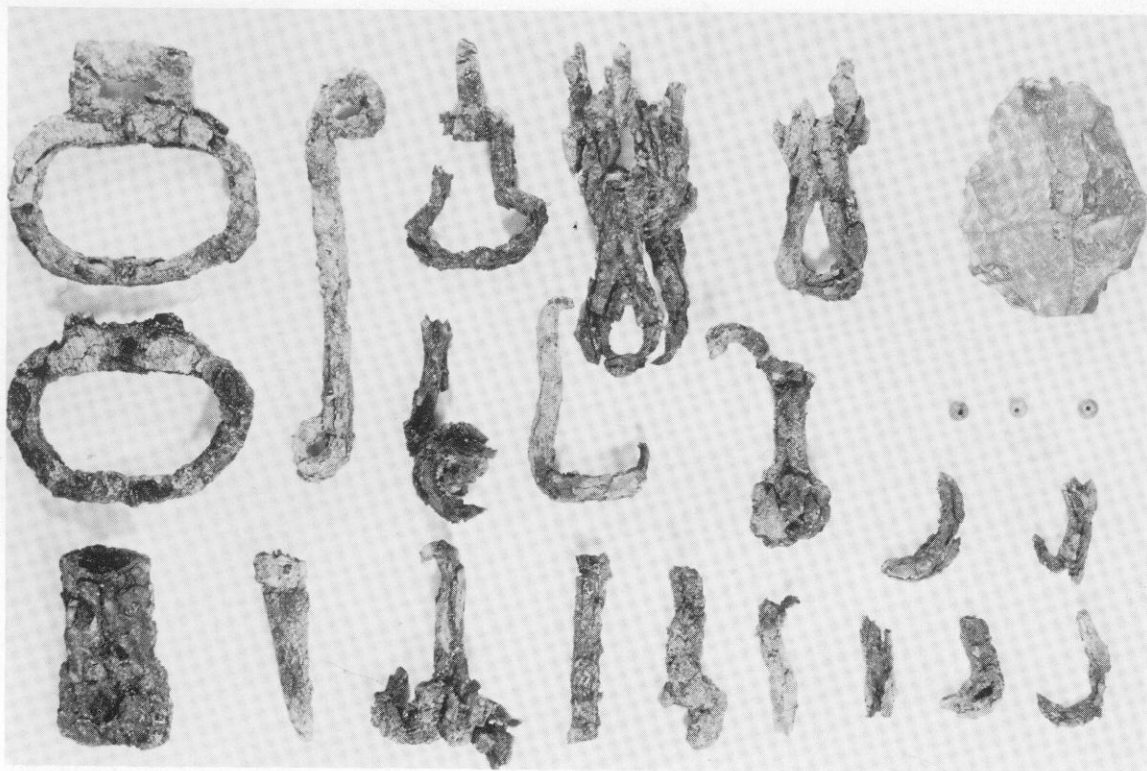
(2) 杉の谷第2号墳玄室(左側壁)



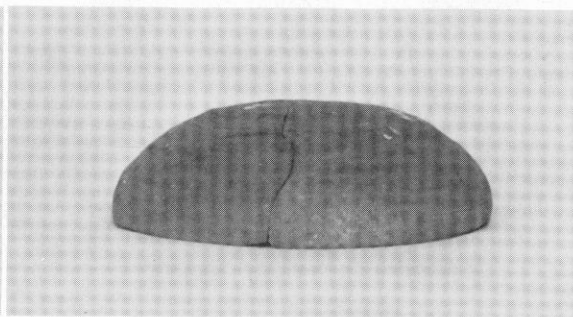
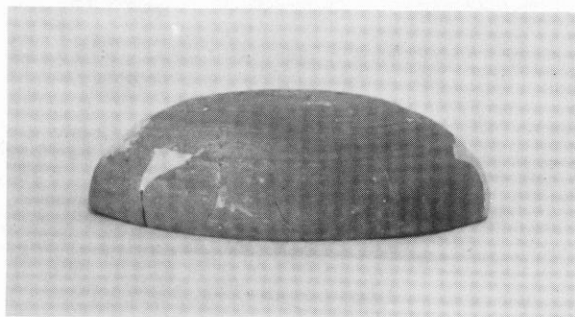
(1) 杉の谷第2号墳玄室(奥壁)



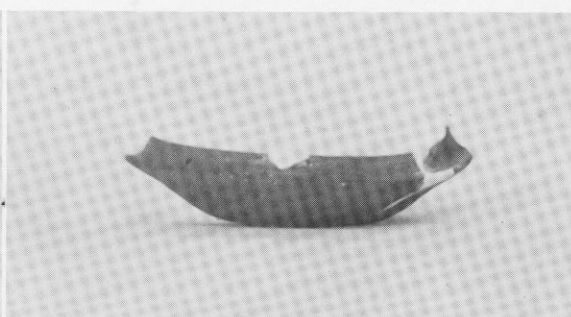
(2) 鉄鋳



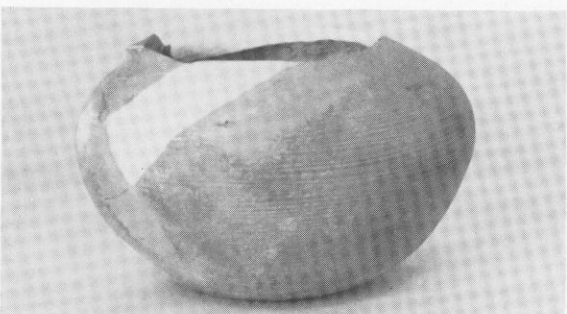
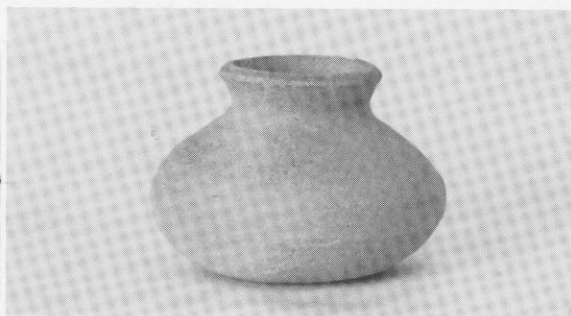
(1) 鉄器 (馬具・工具) ・丸玉・石器



(2) 須恵器



(1) 須恵器



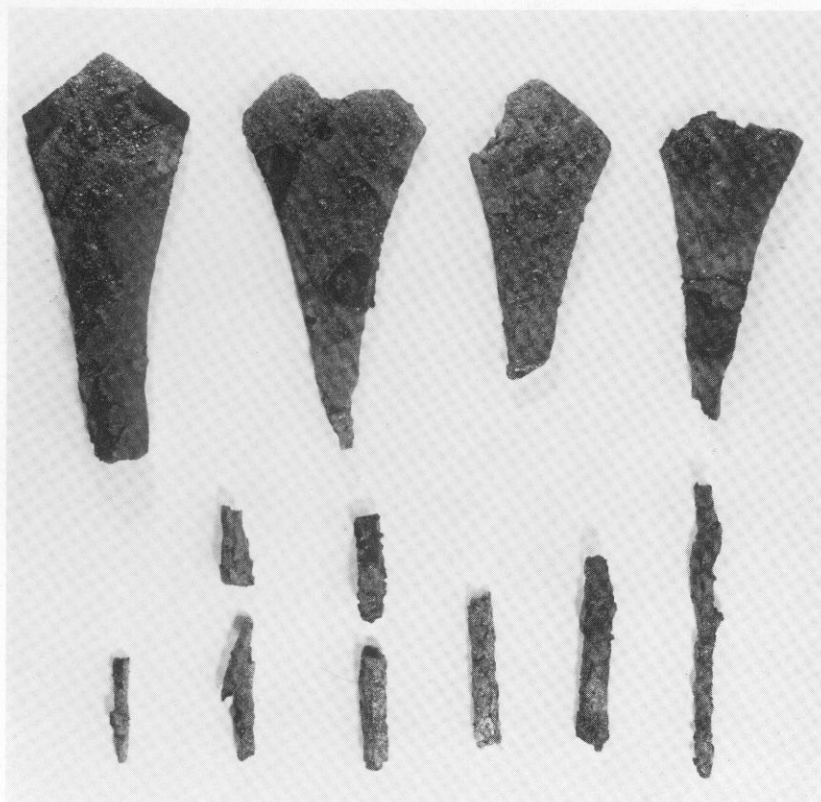
(1) 須恵器・土師器



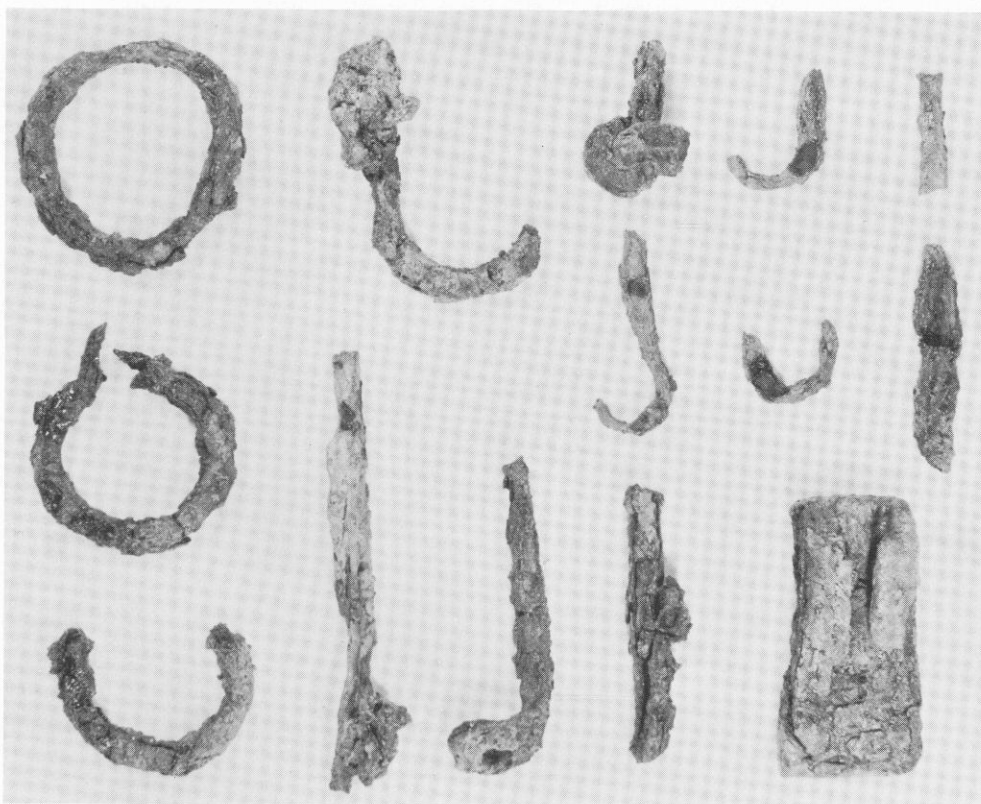
(1) 杉の谷3号墳近景



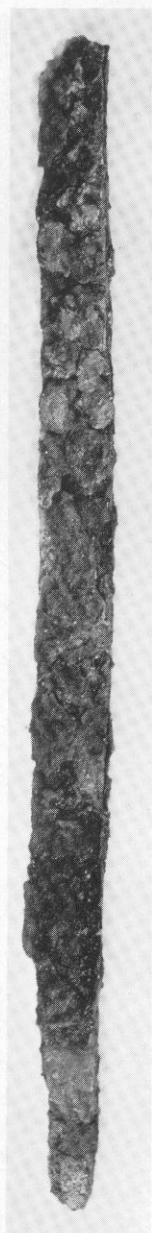
(2) 杉の谷第3号墳玄室(奥壁)



(1) 鉄鏃



(2) 馬具・工具



(3) 直刀

カケ塚古墳

筑紫野市大字紫カケ塚所在の古墳の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 3 集

1979

筑 紫 野 市 教 育 委 員 会

例 言

1. この報告書は、筑紫野市大字紫187-23外に所在するカケ塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び遺物整理・報告は、株式会社高田屋の委託を受け、筑紫野市教育委員会が行った。
3. 本書の執筆は、Ⅰを山村淳彦が、Ⅱ～Ⅳを奥村俊久が担当した。
4. 本書の編集は山野洋一が担当し、奥村俊久が協力した。

本文目次

	頁
I 調査の経過	33
1 調査にいたる経過	33
2 調査経過	33
II 位置と環境	34
III 調査の内容	38
IV まとめ	46

図版目次

	本文対照頁
PL. 1-1 遺跡遠景写真（西より）	34
2 遺跡遠景写真（北より）	34
PL. 2 石室全景写真（南より）	38
PL. 3-1 石室全景写真（西より）	38
2 石室全景写真（東より）	38
PL. 4-1 左側墓墳裏込め状態	38
2 右側墓墳裏込め状態	38
3 奥壁左隈裏込め状態	38
PL. 5 鏡・装身具・須恵器	39
PL. 6 鉄器	39

挿図目次

	頁
Fig. 1 カケ塚古墳周辺遺跡地図	35
Fig. 2 カケ塚古墳周辺地形図	36
Fig. 3 カケ塚古墳地形測量図	37

Fig. 4	カケ塚古墳石室実測図……………	折りこみ
Fig. 5	遺物出土状況・玄室プラン……………	39
Fig. 6	カケ塚古墳出土鏡片・装身具実測図……………	40
Fig. 7	カケ塚古墳出土鉄器実測図……………	41
Fig. 8	カケ塚古墳出土須恵器実測図……………	42
Fig. 9	カケ塚古墳出土須恵器・土師器実測図……………	44
Fig. 10	カケ塚古墳出土石鏃……………	44

表 目 次

		頁
表 1	玉類計測表……………	45
表 2	土器要説……………	45

I 調査の経過

1 調査にいたる経過

1979年4月、北九州高田屋(株)より、筑紫野市大字紫187-23外の開発計画が出された。しかし、計画区域内には通称カケ塚とよばれる古墳があり、工事施行前に調査する必要が生じた。そこで、土地所有者の高田屋(株)と工事施行者の三井建設(株)、調査主体者である筑紫野市教育委員会の三者で協議した結果、高田屋(株)より寄付金(調査費)を受け、5月下旬より調査を実施した。

一方、カケ塚古墳周辺では、すでに他会社による土取り工事が行われており、工事を続行すれば、調査自体に危険を及ぼしかねない状態であったので、三井建設(株)を通して土取り業者に調査終了まで工事を中止するよう通告した。

こうして諸手続きを済ませ、5月21日から5月30日まで発掘調査を、5月31日から6月2日まで遺物整理作業を実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	萩尾利弘
	同	社会教育課長	武藤久雄
	同	社会教育係長	竹田征治
	筑紫野市立歴史民俗資料館々長		野村千里
庶務会計	同	主事	山野洋一・山村淳彦
調査担当	同	主事	山村淳彦・山野洋一
	同	臨時職員	奥村俊久
遺物整理担当	同	主事	山野洋一
作業員			北川正子・高倉一子・村上喜代

2 調査経過

5月21日(月) 晴れ

午前9時、作業員3名を資料館に集合させ現地へ、機材を運搬する。10時より古墳主体部の

発掘を開始する。一方で、古墳及び周辺の地形測量を行う。

初夏の陽射しは強烈で、周辺にはそれをさえぎるものがないので女性作業員にとっては、過酷な初日であったろう。

5月22日（火） 晴れ

地形測量を完了する。昨日、玄室床面近くまで掘り進んだと思われたが、玄室内の落石などから判断して真の床面は、これより20cmほど下にありそうである。玄室から羨道部にかけて、攪乱された土が流入しており床面が見わけにくい。

5月23日（水） 晴れ

昨日にひきつづき石室内の発掘を行い、石室前方のコーナーを検出し、石室入口の梱石らしいものも検出する。また、床面から浮いた状態で須恵器杯蓋片が出土した。午後から墓壙を確認するため、東西方向にトレンチを入れる。

5月24日（木） 晴れ

午前中、石室内の清掃中ガラス小玉6個が出土した。また、墓壙を確認した。

5月25日（金） 晴れ

午前中、主体部及び遺物出土状況の写真撮影を行う。午後より石室内割り付ののち、実測に入る。

5月26日（土） くもり

石室内の実測を行う。

5月28日（月） 晴れ

石室の実測を行う。作業員は墓壙の発掘を行う。

5月29日（火） 晴れ

墓壙を完掘し、実測も完了する。

5月30日（水） 晴れ

午前中、写真撮影を行い、午後より機材を撤収し全ての現場作業を完了する。

5月31日から6月2日まで、資料館において出土遺物の整理・復元を行う。

II 位置と環境

カケ塚古墳は筑紫野市大字紫187-23外に所在する。

筑紫野市のほぼ中央には宝満山より派出した山稜が延び、山稜は大きく開析されていくつかの丘陵を形作っている。この丘陵上には多くの遺跡が点在するが、なかでも山稜西側の丘陵は

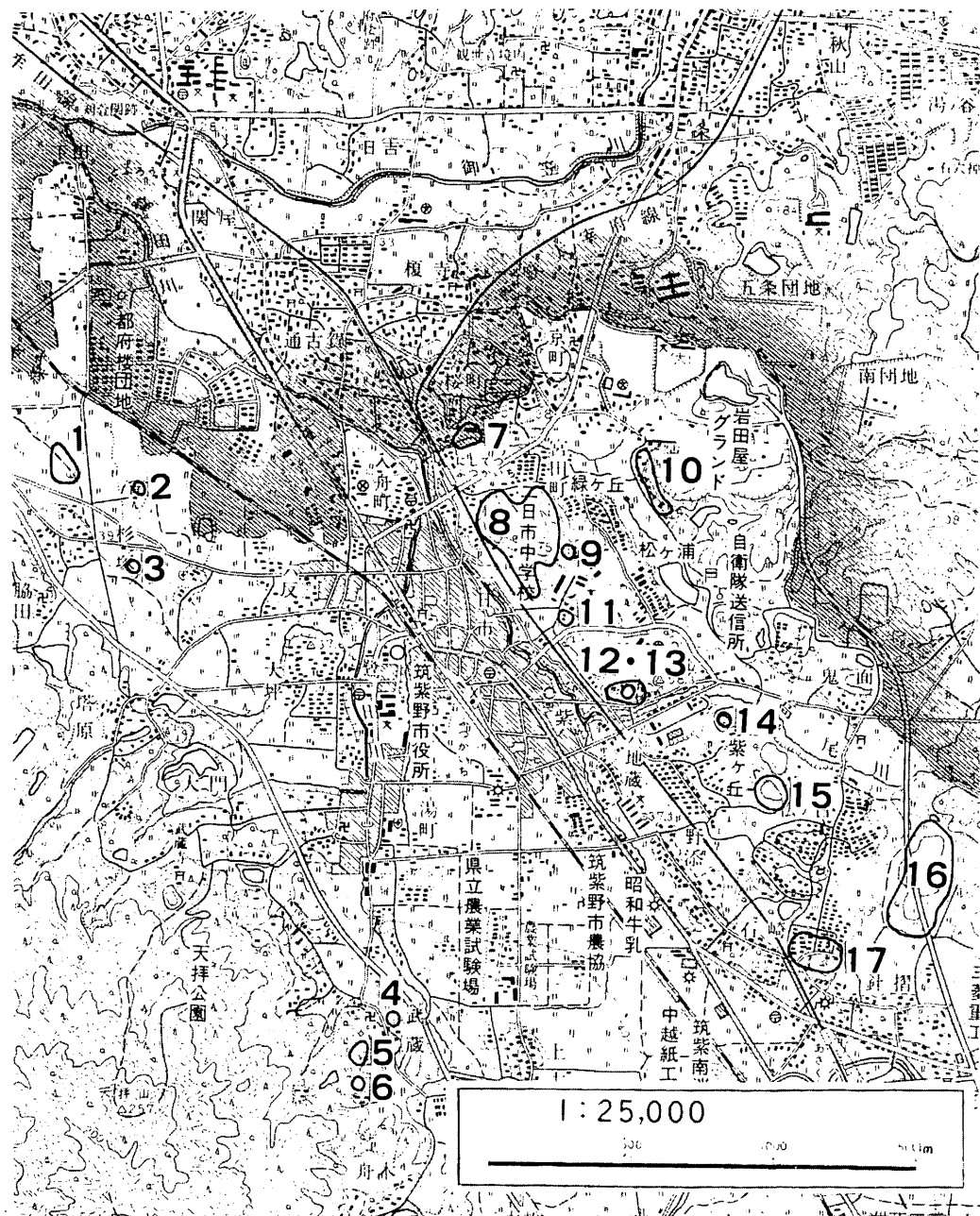


Fig.1 カケ塚古墳周辺遺跡地図

- | | | | | |
|-----------|----------|----------------|------------|---------------|
| 1. 剣塚遺跡 | 5. 八咫古墳群 | 9. 修理田遺跡 | 13. 五穀神山古墳 | 17. 針鋸(下石仏)遺跡 |
| 2. 埴安神社古墳 | 6. 畑添2地点 | 10. 陣尾遺跡 | 14. カケ塚古墳 | |
| 3. 唐人塚古墳群 | 7. 峰遺跡 | 11. 二日市中学校校庭遺跡 | 15. カケ塚遺跡 | |
| 4. 原口古墳 | 8. 峰畑遺跡 | 12. 五穀神山遺跡 | 16. 野黒坂遺跡 | |

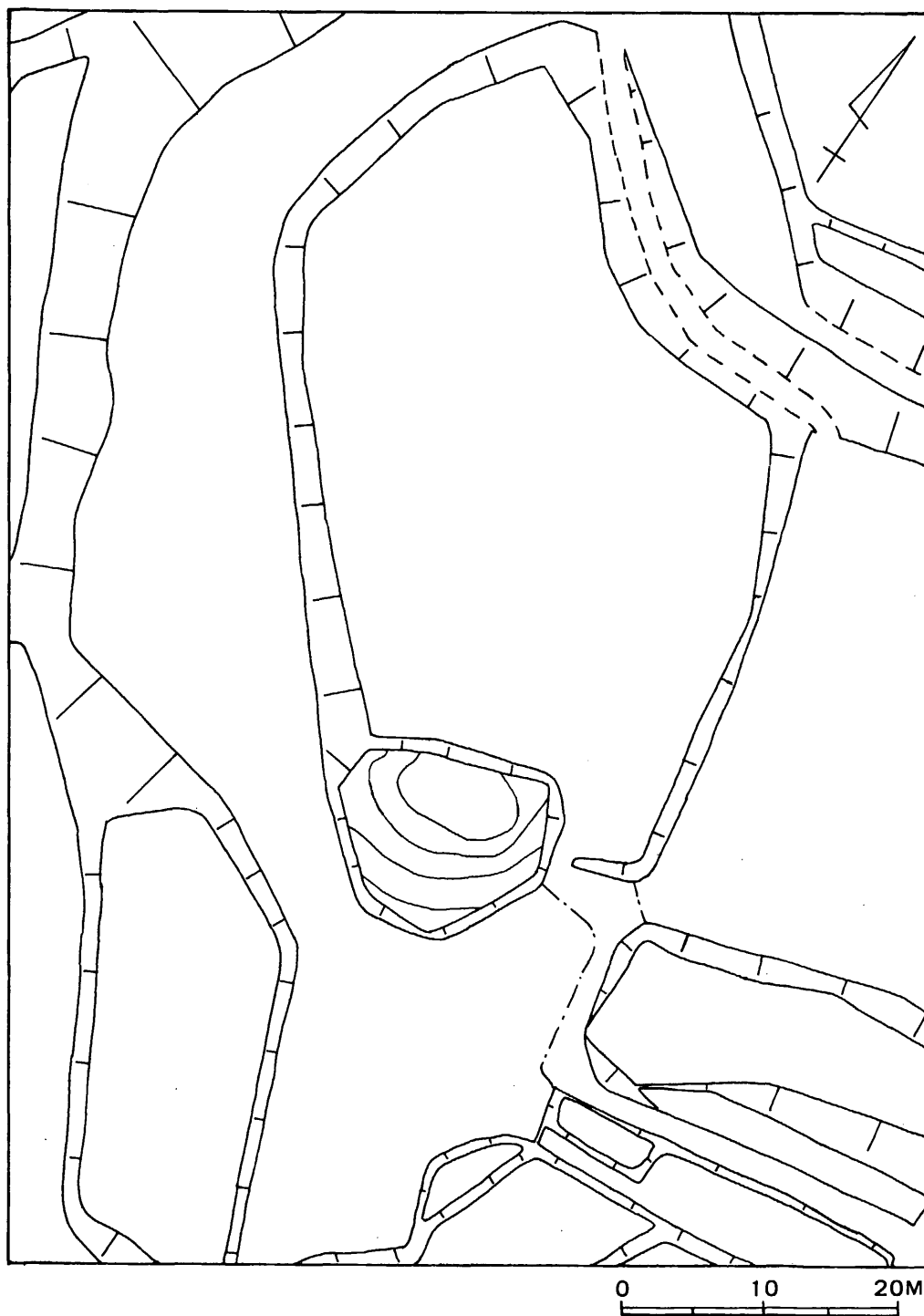


Fig. 2 カケ塚古墳周辺地形図(縮尺1/500)

峰遺跡(7), 峰畑遺跡(8), 修理田遺跡(9), 二日市中学校校庭遺跡(11), 五穀神山遺跡(12), 五穀神山古墳(13), カケ塚遺跡(15), 針摺(下石仏)遺跡(17), など特に多い丘陵である。この丘陵はその中ほどで南北に二分できるが, カケ塚古墳はその南側丘陵の北端頂部, 標高54mの所に位置し, 筑紫野の平野を眼下に, 天拝山を始め背振山塊東端の山々を望む好地に構築されている。周囲は比較的古くから宅地化が進み, また戦後には開拓団等が入ったため本来の地形は失われており, 周囲の歴史的状況はつかみにくい。しかし, カケ塚古墳に隣接する古墳は認められず, 群集墳の形はとっていないものと思われる。

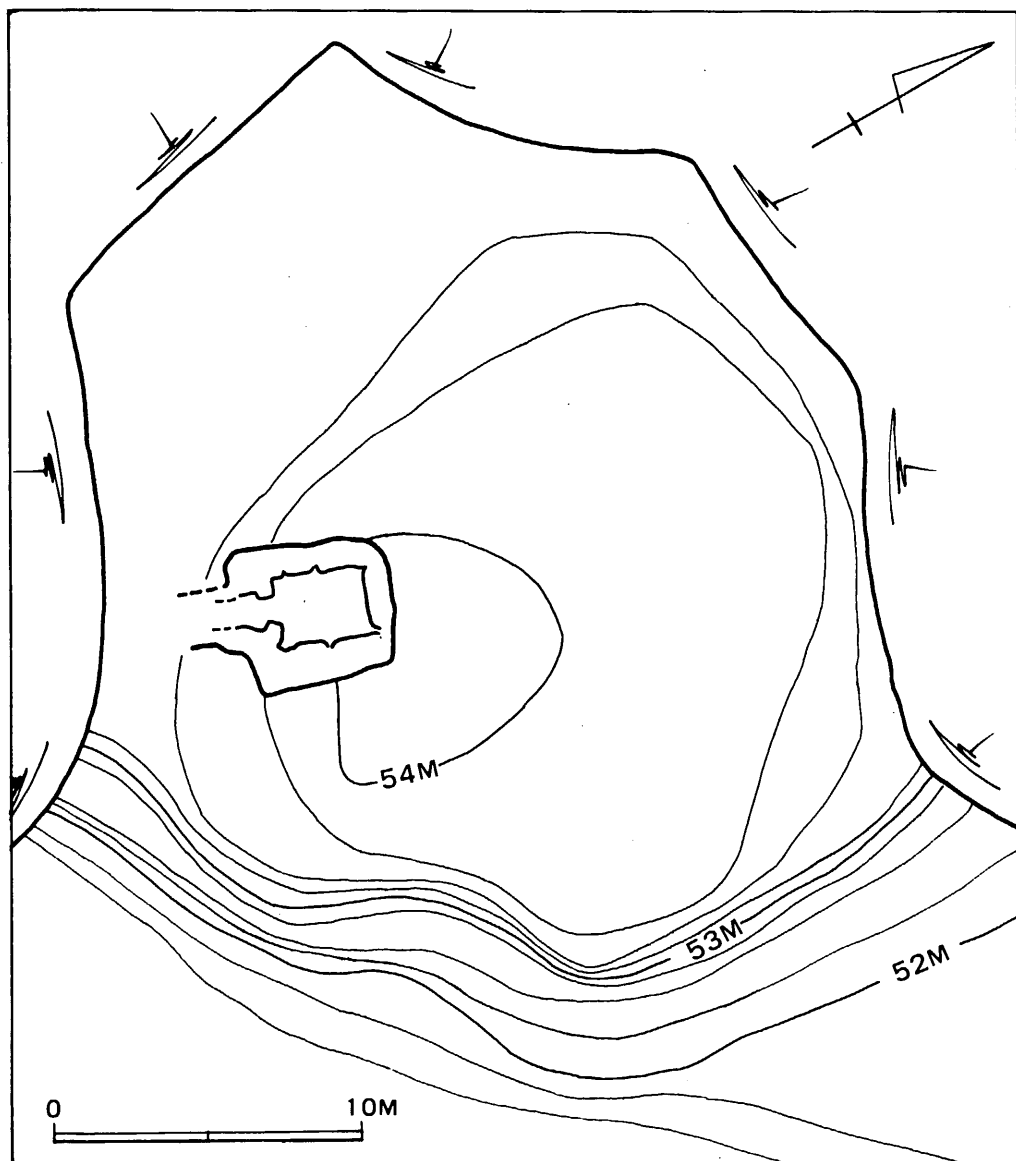


Fig.3 カケ塚古墳地形測量図(縮尺1/250)

III 調査の内容

墳丘 (Fig. 2・3)

墳丘はブルドーザーにより削平を受け、調査前に取り払われており、玄室腰石の上部が露出している状況であった。昭和46年の時点では「円墳で直径約10m、高さ約2mで、すでに中央部に大きな盗掘坑があり、石材をぬかれてしまっている。」(註1)という状況であったが、当時においても開墾などでかなりの地形変更があり、本来の墳丘の規模や形態は失われていたものと思われる。今回の調査にあたっては石室周辺の地形変更がさらにひどく、残念ながら正確な墳丘の形態を明らかにすることはできなかった。

墓壙と墓道 (PL. 4-1・2)

墓壙南側は、ブルドーザーによる削平を著しくうけ明瞭さを欠く。

墓壙は長さ5.7~6.3m、最大幅4.75mを計る略方形を呈すが、左壁は奥壁から4.6mの所でくびれて幅をせばめる。壁面は垂直に近い角度で掘り込まれ、更に墓壙壁縁部に腰石据え付けの壙を掘る。

墓道はその一端しか確認できなかったが、ゆるく西側にカーブして下るものと思われる。

石室 (Fig. 4, PL. 2・3・4-3)

内部主体は主軸をN-22°-Eにとり、南に開口する単室の両袖型横穴式石室と思われる。

石室は玄室腰石など若干の石材を残し、大半の石材を失っており、羨道部は大破している。玄室は奥幅2.23m、前幅2.15m、右壁長2.88m、左壁長2.93mを計り、壁体の構成は奥壁1石、左・右壁各2石の大ぶりの花崗岩を横位に用いて腰石とし、左・右壁玄門部側にはさらにやや小ぶりの石材を各1石補充している。奥壁腰石は1.3×2.3×0.6mを計り、残存石材中最大のものを用いる。右壁は横長の石材を腰石とするが、玄門側の腰石は長期に渡り石室上部より加わった重量や後世の石室破壊等によって強く内傾する。左壁は楕円状及び横長の用材を腰石とするが、奥壁とのすき間が大きく、この部分に比較的大きな石材を配し、さらに右奥壁角よりもしっかりした裏込めが行われている。左・右壁の腰石はいずれも内傾しているが右壁玄門側腰石を除いて石室構築時の姿を示しており、失なわれている腰石より上部の石組も、腰石の内傾にそって天井部に向かっていたものと思われる。

玄門部は、左右袖石がぬかれていたが、そのぬき跡を確認することができた。ぬき跡は、右袖石で床面からの深さ43cmを示し、略方形のプランを、また左袖石は同じく47cmの深さで、長方形のプランを呈す。いずれも底部は尖り気味で、縦長の石材を方柱状に据えていたものと思われる。玄門の幅は、袖石のぬき跡から、63cmを計ることができた。

— L.54.417m

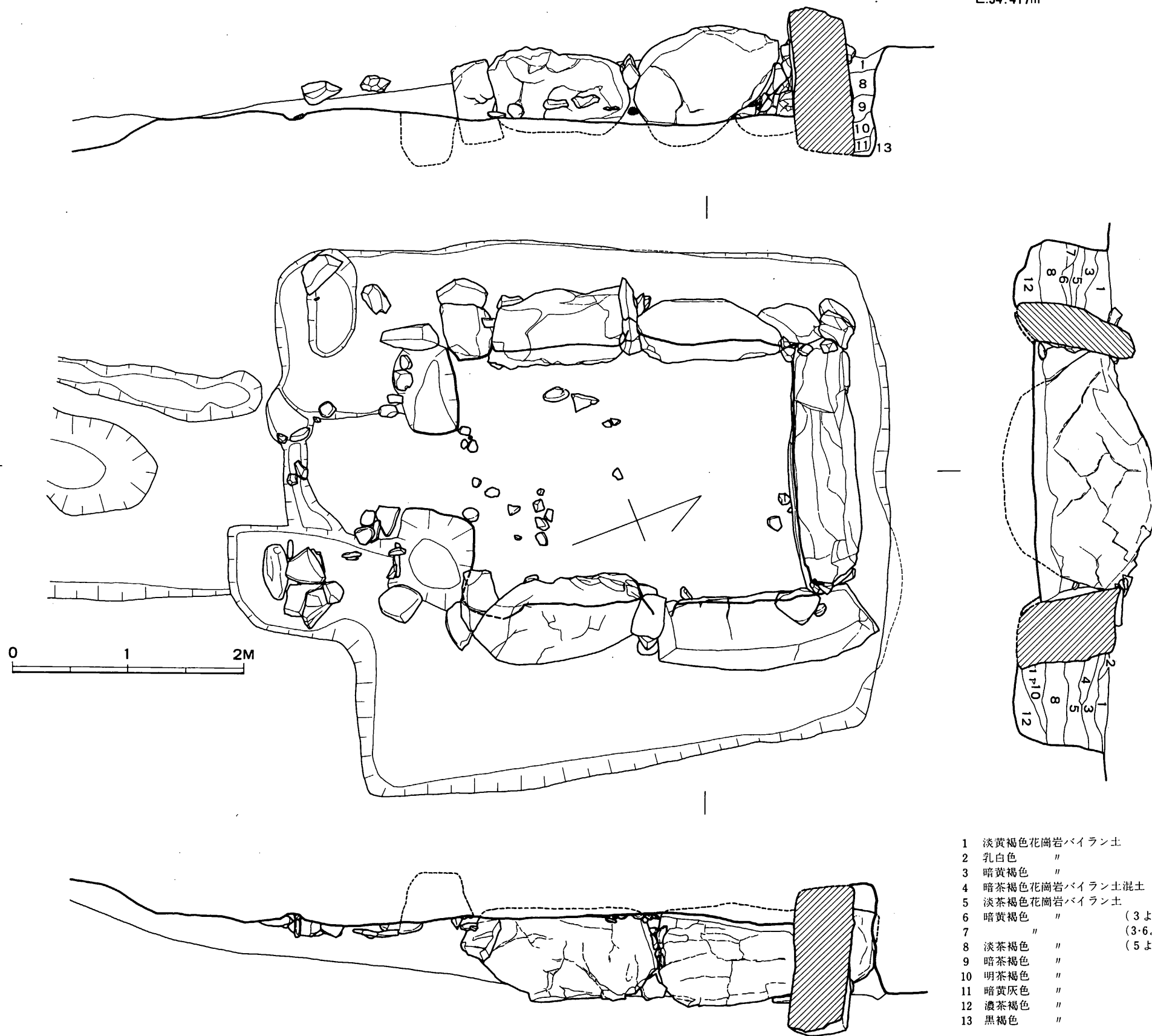


Fig.4 カケ塚古墳石室実測図(縮尺1/40)

玄門から羨道部にかけては破壊が著しく、詳細は不明であるが、玄門より1.4m程前に主軸に
対し、直角に走る窪みが認められ、ここに柵石が配されていた可能性がある。

遺物 (Fig. 5～10, PL. 5・6)

出土状況 (Fig. 5)

石室内は、すでに盗掘をうけ荒らされていたが、玄室左側奥壁よりに比較的まとまった、
遺物の出土をみた。明らかに副葬品と思われるのは、下記のとおりであるが、耳環と刀子
1点は、床面よりやや浮いた状態で検出された。

出土遺物

鏡	鏡片	1点
装身具	耳環	1個
	丸玉・小玉	9個
武器	直刀	2振
	鉄鏃	5本
工具	鉄斧	1本以上
	刀子	1本

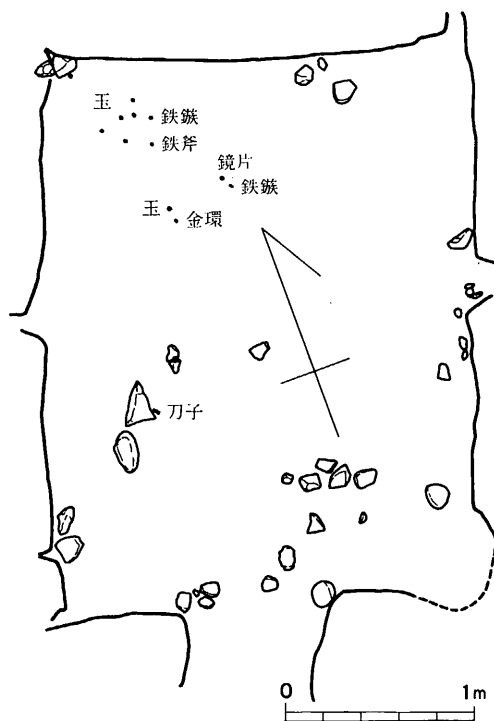


Fig. 5 遺物出土状況・玄室プラン (縮尺1/40)

以上、発掘調査で検出されたもののほかに、
調査前ブルドーザーによる削平が行われた際
羨道部付近より出土したと思われる鋤先や須
恵器・土師器等が採集された。いずれも破損がひどい。採集されたものは、下記のとおりであ
る。

農具	鋤先	1点
土器	須恵器	18個体
	杯(蓋・身)	9個体
	高坏	1個体
	有蓋高坏	1個体
	甗	1個体
	壺	1個体
	椀	1個体
	甕	3個体

撮付蓋	1 個体
土師器	2 個体
椀	1 個体
甕	1 個体

鏡片 (Fig. 6-1, PL. 5) 仿製鏡縁部の小片である。縁部の残りは良好であるが表・裏面は腐蝕が著しい。縁部は2.5mmの厚みをもって内傾し、無文帯をもつ。直径は計測不能であるが、10cmは出ないと思われる。

耳環 (Fig. 6-2, PL. 5) 金環である。外径2.3~2.7cm、内径1.2~1.5cmの楕円形に近い形態をもつものと思われる。中空の銅胎に金箔をおいたものであるが、破損が著しい。

丸玉・小玉 (Fig. 6-3~11, PL. 5, 表1) すべてガラス製である。胴部は球状に張り出し、やや扁平で、上下に平滑面をもつ形態のものがほとんどであり、中央の孔はほぼ垂直に貫通するが、11は断面が平行四辺形をなし、孔も胴部と平行に斜行する。

直刀 (Fig. 7-1・2, PL. 6) 2点出土した。1は身部の破片で、錆とひびわれが著しい。断面は身幅3cm、背幅1cmの二等辺三角形をなす。2は身部から茎部へかけての破片で、 $\frac{1}{2}$ ほどが身幅2.3cm、背幅0.7cmで明らかに刀の類の断面を呈すが、中ほどからもう片方にかけては、厚さ、0.3~0.4cmと薄く、両端は丸みをもつ。関部は明瞭でなく、薄い部分を茎と推定するにも疑問は残る。

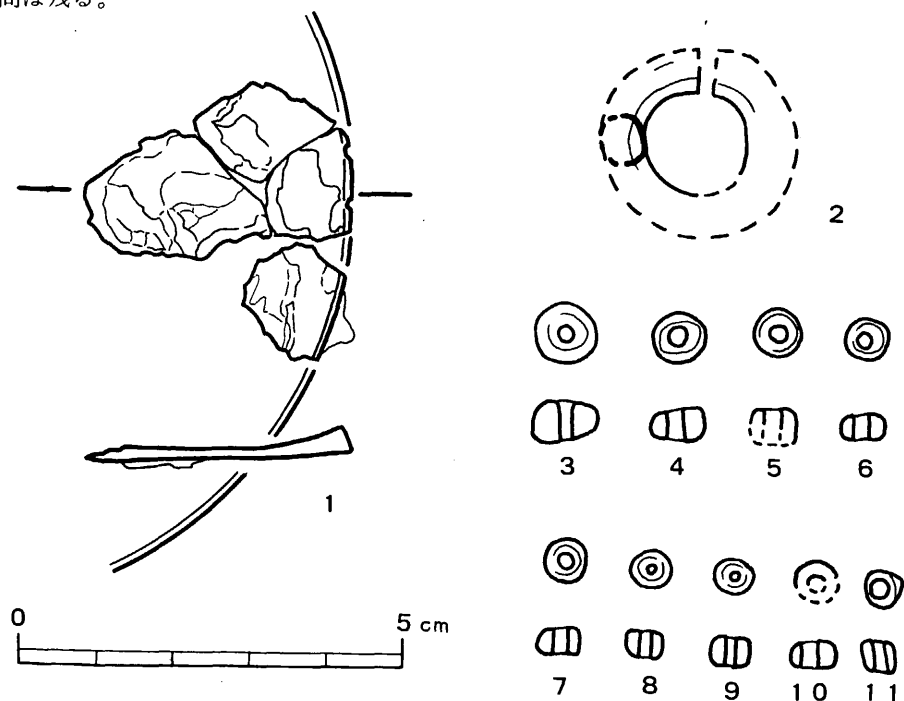


Fig. 6 カケ塚古墳出土鏡片・装身具実測図(実大)

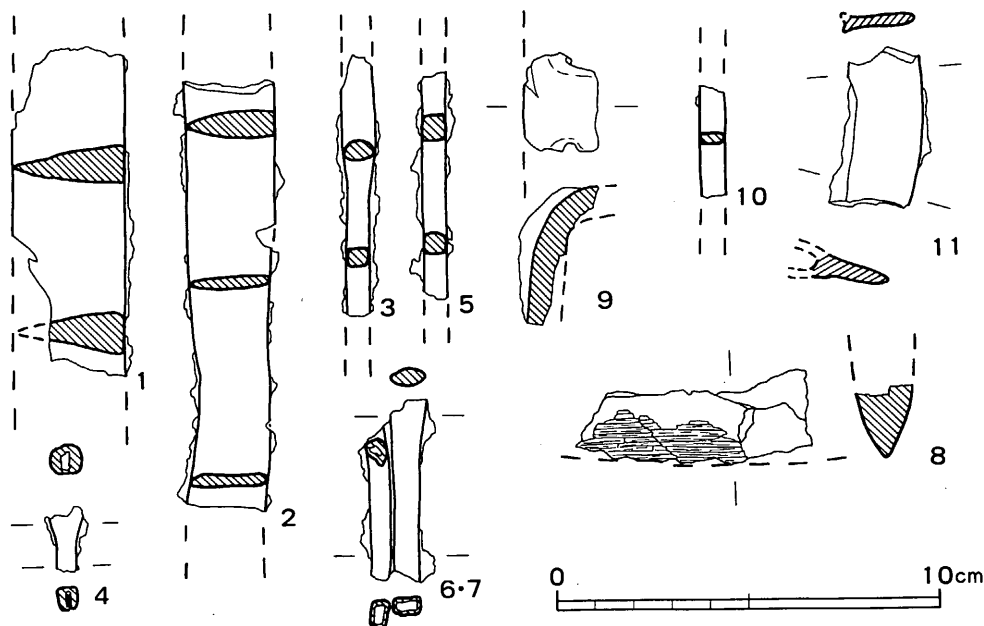


Fig.7 カケ塚古墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)

鉄鏃(Fig.7-3~7, PL.6) 6点出土した。7は両丸造細根鑿箭式の類が考えられ、他の3~6も同種鏃の小片であろう。3は峰部及び基部を欠損する。また6・7は中空となっている。

鉄斧(Fig.7-8・9, PL.6) 8は刃部の破片で、残存幅6.2cmを計る。両刃であるが、断面をみると刃の端部は中心より若干ずれる。表・裏面には、木皮の付着が認められる。9は袋部の破片である。

刀子(Fig.7-10, PL.6) 茎部の破片で、残存長3cm、幅0.3cmを計る。

鋤先(Fig.7-11) 基部の小片である。幅2.2cm、厚み3~4.5cmを計る。

須恵器(Fig.8・9, PL.5, 表2)

杯蓋(Fig.8-1~4) 1は口径14.6cm、器高3.9cmと推定される。ゆるやかなカーブをもつ天井部から、小さな段を境にして、体部へ至る。口縁部は、開き気味に直立し、端部は僅かに外反する。口唇部裏面は内傾し、僅かな凹面を残す。2は口径14.2cmと推定される。天井部と体部との境に一条の沈線がめぐる。口縁部は、1と類似し、外反気味に直立する。端部は丸くおさまり、口唇部裏面は内傾し、僅かな凹面を残す。3は口径14.8cmと推定される。天井部と体部との境に、凹線状に窪んだあまい段を有す。口縁部は丸みをもって開き、端部は丸くおさまる。また、口唇部裏面には、一条の沈線がめぐる。4は口径12.6cm、器高3.3cmと推定される。丸みをもって、天井部から体部へ移行し、口縁部付近は、内湾気味となる。口縁端部は僅かに平坦面をもち、裏面はあまく内傾する。

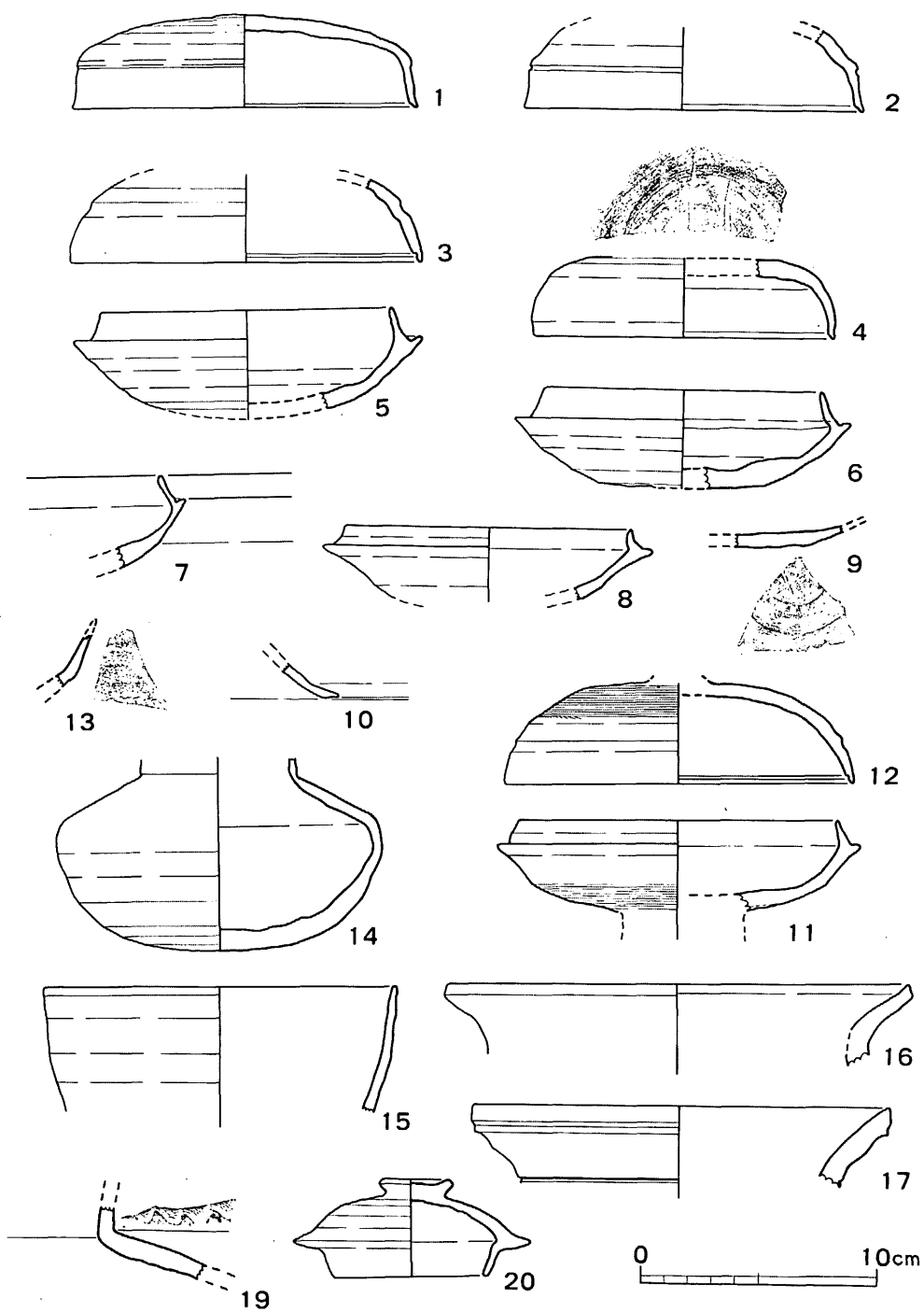


Fig.8 カケ塚古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

坏身 (Fig. 8-5~9) 5は口径12.4cm, 受部径14.8cm, 器高4.6cmと推定され, 立ち上り高1.4cmを計る。立ち上りは内傾し, 受け部は上方に引き出され, 端部は丸くおさまる。体部は, 比較的強いナデにより調整され, 凹凸が残る。6は口径11.7cm, 受部径14.3cm, 器高4.2cmと推定され, 立ち上り高は1.4cmを計る。立ち上りは内傾し, 中ほどから若干引き起こされる。受け部は凹状となし, 端部は水平に引き出される。体部は浅いカーブを描きながら, 平坦な底部へ移行する。7は小片である。立ち上り高は1.1cmを計る。立ち上りは内傾し, 端部でやや厚味を増し丸くおさまる。受部は細い凹状をなし, 端部はやや上方へ引きだされる。8は口径12.2cm, 受部径14cmと推定され, 立ち上り高は0.8cmを計る。立ち上りは内傾し, 途中から直立する。受部は水平に引き出され, 体部は内湾気味である。9は底部の破片で, ヘラ記号が認められる。

高坏 (Fig. 8-10) 脚裾部の小片である。端部近くであまく屈曲し, 端面に鈍い凹面をめぐらす。

有蓋高坏 (Fig. 8-11・12) 11は杯部で, 口径13.5cm, 受部径15.4cmと推定され, 立ち上り高は1cmを計る。立ち上りは内傾し, 途中でやや屈曲する。受部は僅かに凹状をなし端部は水平に引き出される。天井部外面は, 回転ヘラ削りを施した後, カキ目調整を行っている。12は色調・胎土・焼成・手法より11の蓋と考えられる。口径14.8cm, 器高4.3cmと推定され, 撮の有無は不明である。形態は, 坏蓋3とほぼ同一であるが, 整形は段のところまで回転ヘラ削りが施されていない。天井部にはヘラ削りを施した後, 11と同様カキ目調整を行っている。

觥 (Fig. 8-13) 口縁部の小片で, 櫛描波状文を有する。

壺 (Fig. 8-14) 口縁部の大半は欠損するが, 残存部より推定すると, ただちに外反するようなことはないようである。体部のやや上方に, 13.8cmの最大径をもち, 頸部からここまで直線的に下る。最大径部から底部にかけて, ゆったりした丸みをもって下り, 器壁の厚みを増す。

碗 (Fig. 8-15) 口縁部から体部にかけての土器である。口径は, 15cmと推定され, 器壁は薄い。口縁部は直行し, 端部は平坦で僅かに肥厚する。また, 体部は途中で僅かに屈曲し, 内傾する。

甕 (Fig. 8-16・17・19, 9-18) 16~18は口縁部, 19は頸部の破片である。16は口径19.9cmと推定される。大きく開いた口縁部の端は鈍く躍ね上がり, 端部には僅かな凹面を残す。17は口径17.8cmと推定される。大きく開く口縁の端部は僅かに凹面をなし, その直下に突帯が貼り付けられている。また, 突帯からやや下ったところには細い沈線がめぐらされている。18は口径33.2cmと推定される大形の甕である。口縁部は大きく開いた後, 水平にのびて端部が上下に肥厚する。端部下面には鈍い凹線をもち, そのやや下に波状文を施している。19は頸部の破片で頸部径10.6cmと推定され, 表面に櫛描波状文を有す。

撮付蓋 (Fig. 8-20) ほぼ完形をなす唯一の土器である。口径6.2cm, 口端部径10.1cm器高4.1

cmを計る。天井部に扁平な撮を有し、丸みをもって体部へいたる。口縁部は水平にのび、内面のかえりは、すばまりながら下方へ突出する。

土師器 (Fig. 9-21・22)

碗 (Fig. 9-21) 口径14cmと推定される小片である。内面はよくナデ調整されるが、胎土には砂粒が多い。焼成はあまく、黄褐色を呈す。

甕 (Fig. 9-22) 底部の小片である。色調は淡褐色を呈し、底部直径は12cmと推定されるものである。

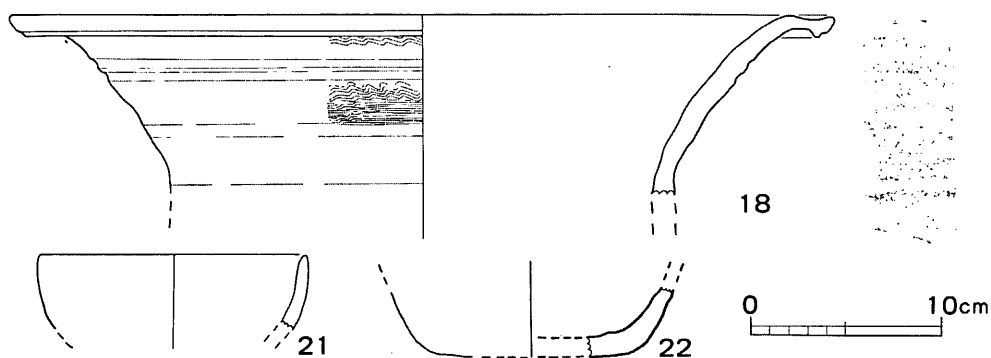


Fig. 9 カケ塚古墳出土須恵器土師器実測図 (縮尺1/4)

石鏃 (Fig.10) 石室を埋めていた土壤中より検出されたもので、尖頭部と脚部を欠き、残存長最大2.2cmを計る。表・裏全面に加工が施されているが、やや粗い。石材は漆黒色を呈す良質の黒曜石で腰岳系のものと思われる。

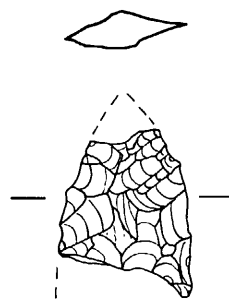


Fig.10 カケ塚古墳出土
石鏃 (実大)

註1 筑紫野町教育委員会編 筑紫野町遺跡調査書A 1971

表 1 玉類計測表

№	種 類	長 径	短 径	長 さ	孔 径	色 調
1	丸 玉	7.1	8.1	5.5	1.3	濃 青 色
2	"	7.2	6.9	4.5	1.9	濃 緑 色
3	小 玉	6.0	6.2	4.4	1.2	明 緑 色
4	"	6.0	5.6	3.2	1.9	濃 青 色
5	"	6.0	5.8	4.4	1.5	濃 緑 色
6	"	5.2	4.8	3.5	1.0	濃 青 色
7	"	5.4	4.9	3.9	"	"
8	"	5.8	6.0	3.9	1.6	"
9	"	4.8	4.2	4.1	1.3	明 青 色

(単位mm)

表 2 土器要説

№	器 種	色 調	胎 土	焼 成	口口回転
1	杯 蓋	青 灰 色	砂 粒 混	良 好	右 回 り
2	"	"	微砂粒混	"	
3	"	暗茶褐色	"	"	
4	"	暗青灰色	砂 粒 多	"	右 回 り
5	杯 身	青 灰 色	砂 粒 混	"	
6	"	"	砂 粒 多	"	右 回 り
7	"	"	砂 粒 混	"	
8	"	"	微砂粒混	あ ま い	
9	"	"	"	良 好	右 回 り
10	高 坏	暗青灰色	"	"	
11	有蓋高坏	淡 褐 色	砂 粒 混	あ ま い	右 回 り
12	高 坏 蓋	"	"	"	"
13	甗	淡青灰色	微砂粒混	良 好	
14	壺	青 灰 色	砂 粒 混	"	右 回 り
15	碗	暗青灰色	微砂粒混	"	
16	甕	"	砂 粒 混	"	
17	"	青 灰 色	"	あ ま い	
18	"	淡青灰色	"	良 好	
19	"	"	"	"	
20	撮付蓋	青 灰 色	"	"	右 回 り

Ⅳ ま と め

カケ塚古墳は以上のように大破しており、詳細は明確に把握できない。そのため若干の推測を含めて、まとめてみたい。

石室構造については、両袖式の単室横穴式石室をもつものと思われ、玄室は長さ約2.9m、幅2.2mのやや大柄な正方形に近い長方形のプランである。この玄室規模は、同市杉塚所在の剣塚1号墳に近い規模をもっている。

造営年代については、石室内より年代を確定しうる遺物を検出できなかったため、墳丘が削平された際に羨道部付近より採集された須恵器を手掛りとする外にはない。杯については、太宰府町裏ノ田遺跡(註1)での分類に比定してみると、1-A類、2・6-B・C類、3・5-C類、4・7-D類、8-E類となり、有蓋高坏もC類に比定されよう。長頸壺などに伴う撮付蓋についてはⅢ～Ⅳ様式に出土を見るが、本墳出土のものは、6世紀中葉前後に比定される剣塚1号墳(註2)出土のものに類似する。

以上のように、出土した須恵器は6世紀代のものであり、杯の主体を占めるⅢa様式、撮付蓋や石室規模にみる剣塚第1号墳との類似などから、本墳の造営期は6世紀中頃に比定されよう。

また、石室内より出土した仿製鏡は古墳の造営年代より珠文鏡であろうと思われるが、推測の域を出ない。

このようにカケ塚古墳は6世紀中頃の古墳で、市内に多い群集墳とは異なり、被葬者のこの地域での勢力は小さくはなかったと思われ、削平された未確認に終わった墳丘もかなり大きなものではなかったかと思われる。

註1 福岡県教育委員会編 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XVII 1977

同報告書の中において、A類=第Ⅱ様式、B・C類=第Ⅲa様式、D類=第Ⅲb様式、E類=第Ⅳa様式と小田氏の編年に比定されている。

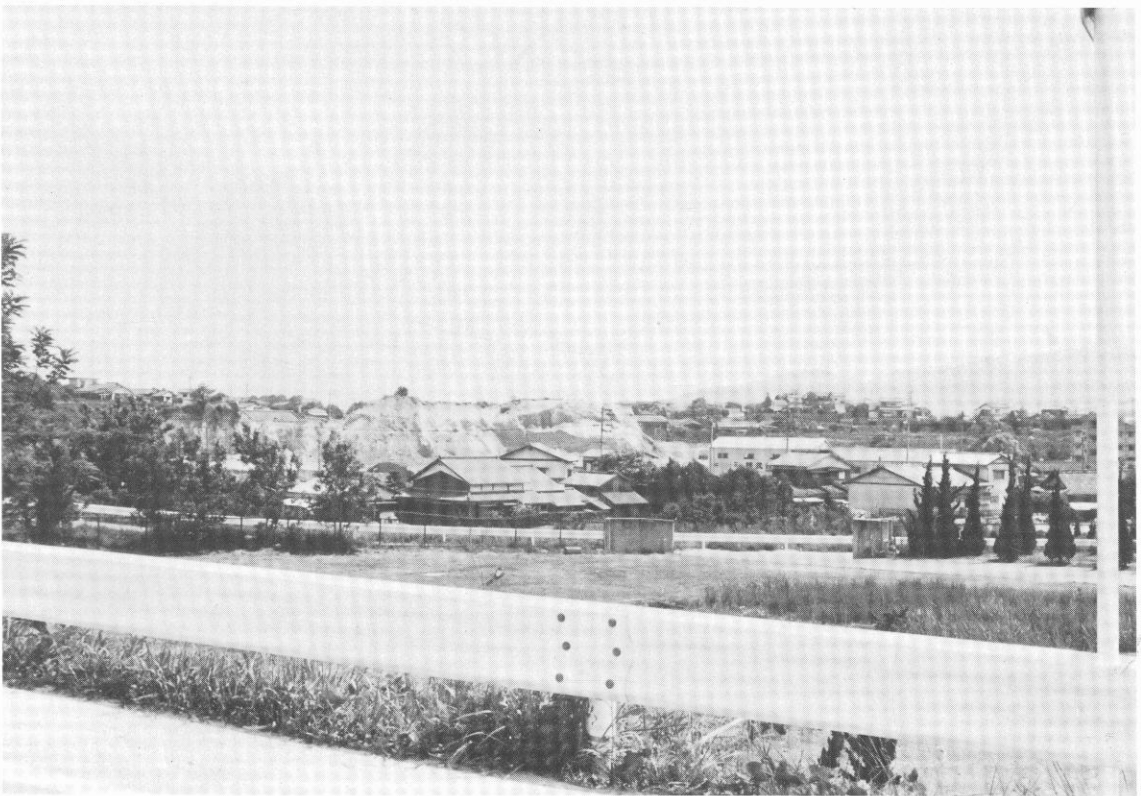
2 福岡県教育委員会編 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIV 1978

PLATES

(カケ塚古墳)



(1) 遺跡遠景写真(西より)



(2) 遺跡遠景写真(北より)



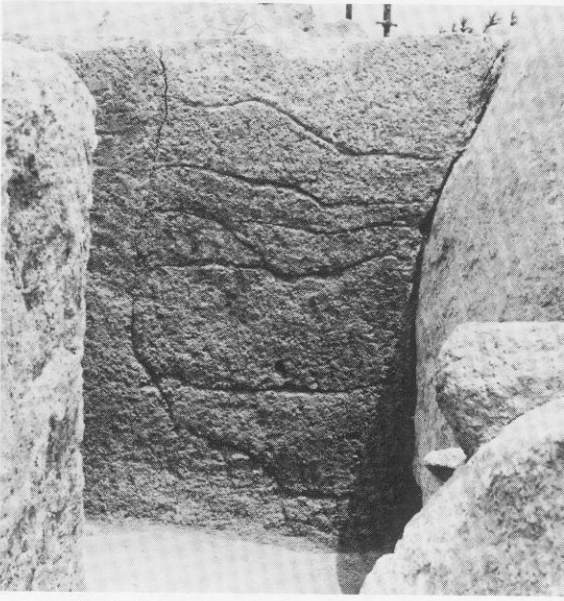
(1) 石室全景写真(南より)

(1) 石室全景写真（西より）

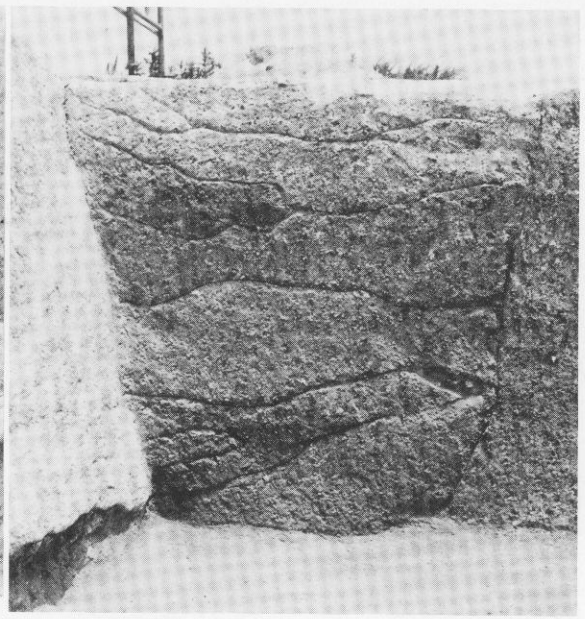


(2) 石室全景写真（東より）

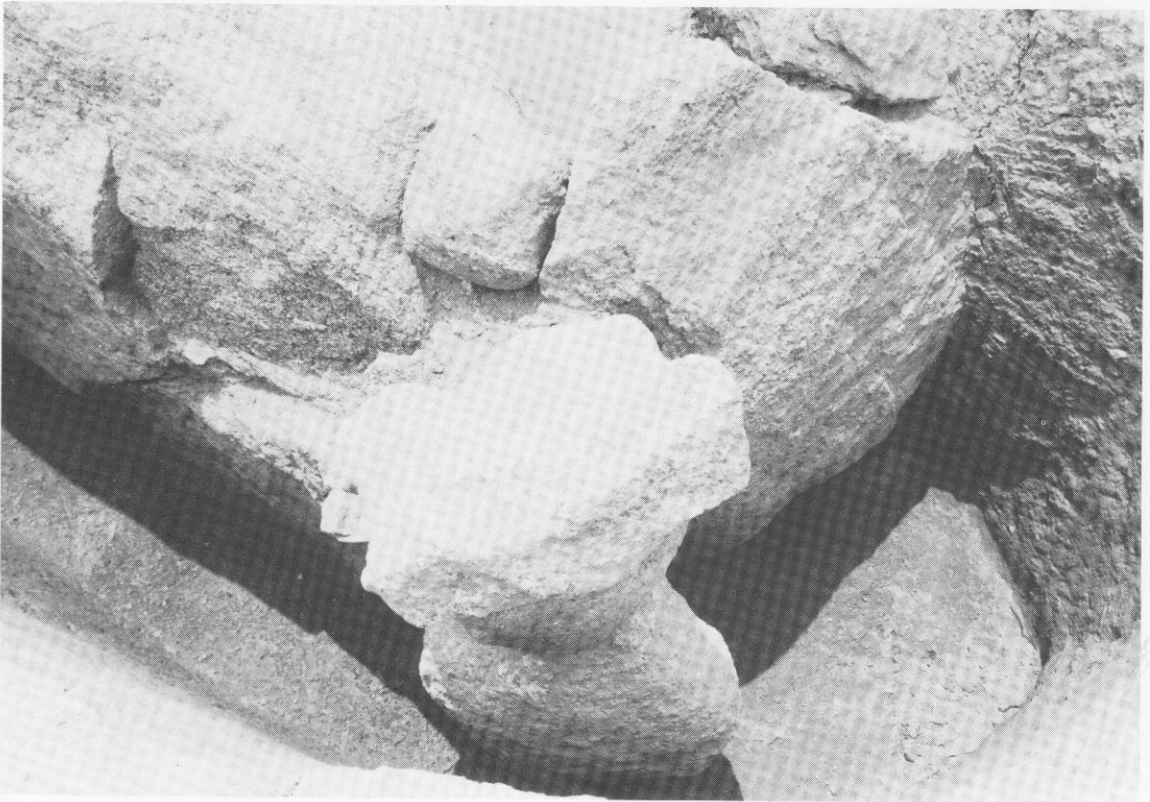




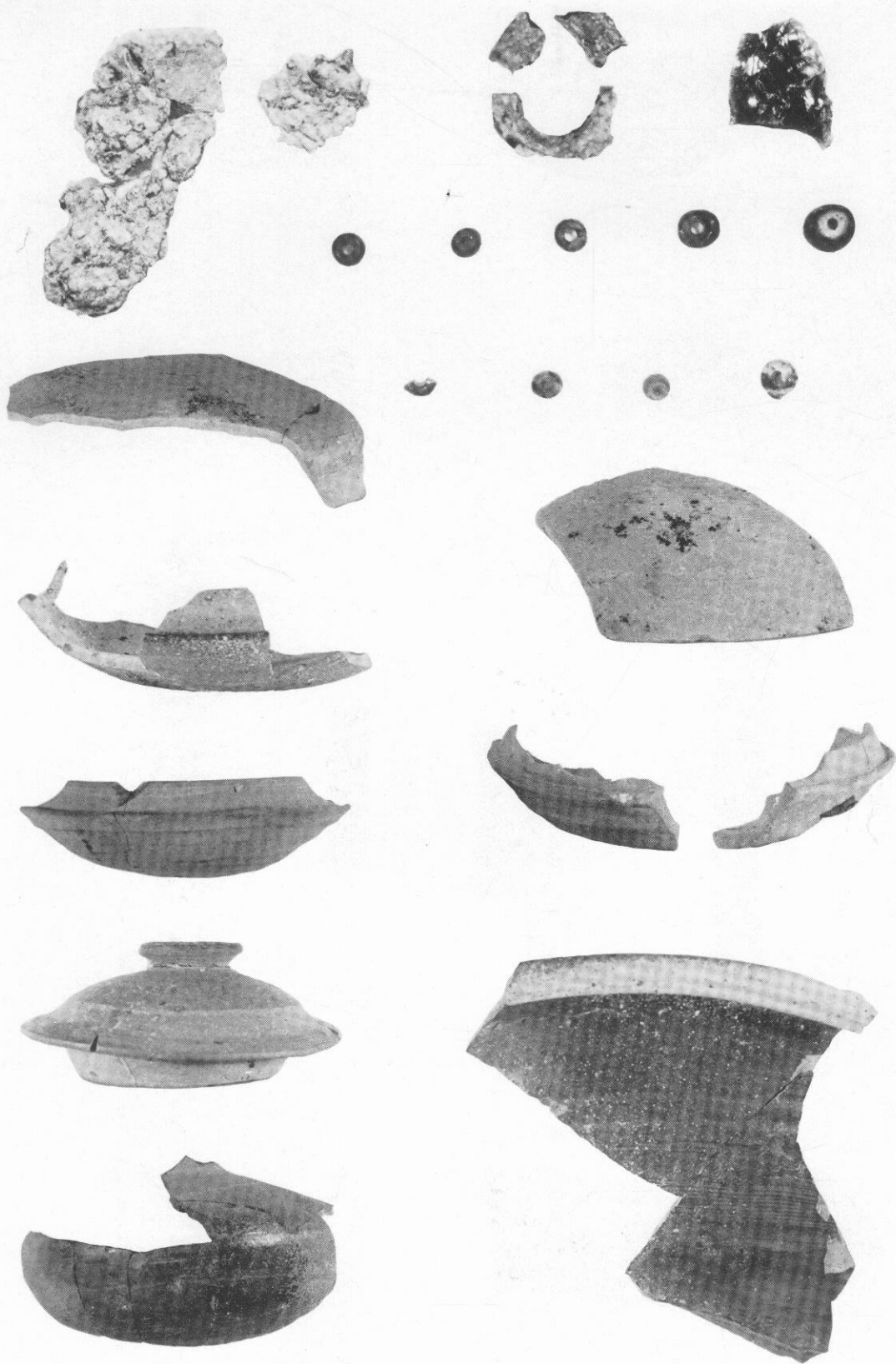
(1) 左側墓壙裏込め状態



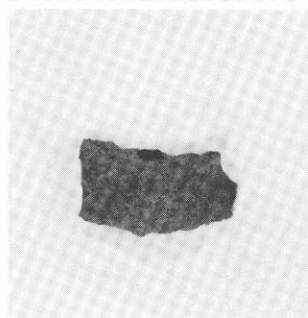
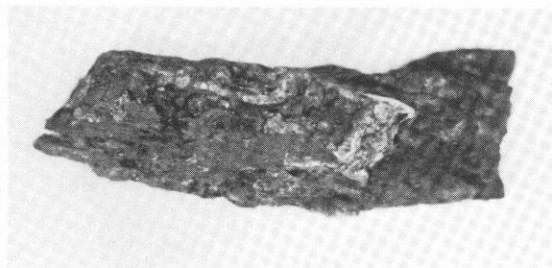
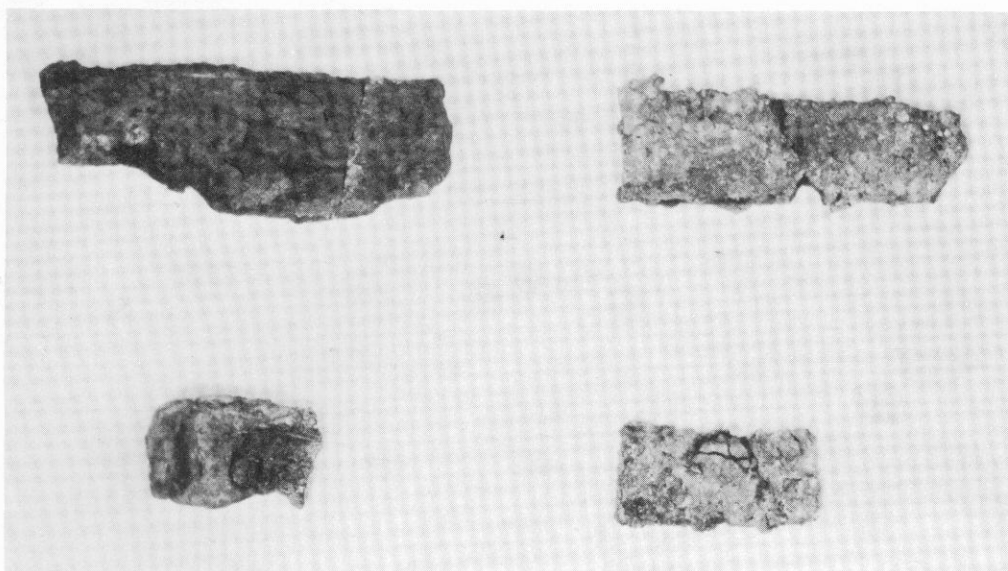
(2) 右側墓壙裏込め状態



(3) 奥壁左隅裏込め状態



(1) 鏡・装身具・須恵器



筑紫野市文化財調査報告書

第2・3集

昭和54年12月25日

発行 筑紫野市教育委員会
筑紫野市大字二日市753の1

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号